

---

# 道行き見えないトリッパー

ガビアル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道行き見えないトリッパー

### 【Nコード】

N7834X

### 【作者名】

ガビアル

### 【あらすじ】

大層な必要性も、必然性もなく、リリカル世界に厨二容姿で混入してしまった主人公の一人称練習作品です。テンプレ展開と見せかけて斜め上に行くこと、まずは荒くとも完結、を目指しております。TS要素有りなので苦手な方はご注意ください。

## 飛んでも平気なプロローグ（前書き）

初めまして。つたない拙作をご覧頂きましてありがとうございます。

皆様の小説を読んでいるうちに妄想止みがたく、書きつつあります。今までちょっと書いては直しての繰り返しでまともに完結した話を作ることが出来なかったので、ただ勢いのままに書き綴っていく所存です。目指すは不格好でも完結。

誤字脱字の注意。ご意見感想など頂ければ幸いです。

## 飛んでも平気なプロローグ

声が聞こえる。

「起き——ください、誰もが垂涎のトリップイベ——がやって——  
——たよ！」

眠い。

買い換えたばかりの羽毛布団の暖かさに包まれながら俺はみじろぎをした。

そつえば昨日は徹夜の仕込みだった。眠いのも当……然……

「……ああもう！ 起——てーっ！」

……騒がしい。

布団を頭に被る。……静かになった。今日は祭りでもあったけ

……さわが……

「……これは——てしましましょうか……あー、ええと、駄目で——。職分ですし全う——とですね」

ゆさゆさと揺れる。揺れる。揺れる。ゆれゆらゆら。じしん？

「……うほ？」

「新感覚な寝ぼけ言葉なのです……いいですか？ まずあなたはトリップすること——りました。何か——があれば聞き入れ——とも——ます」

「……少女のこえが……とりっぷ？」

……とりつぶ……とりつぶ？ とら……ぶ？ とりつくおあと  
ーと……

「少女——ね？ ああ！？ 話し——る間にま——が！ も、もう  
——ったら仕——りません。望——言ってください！」

「んー……羽毛最高、このままねかせ……」

「羽毛……羽——ね。 容姿は適——トリッ——の皆様が望むよ——  
——ものにしておき——」

何か聞こえる。なんかまあ。

「…………すきに……して。ね……む」

「——良い——を——」

ぼーっと布団の温もりの中で、夢見てるなーなんて夢の中で思いながら、俺はまた眠りについた。

目覚めは首筋をなでる冷たい感覚だった。

「……んあ？」

妙に細い声が聞こえる。それよりこの冷たいのは？  
起きてみ……ようとして体が固まった。

冷たいものはどうも生き物だったらしく動いている。首筋を這い  
ずりまわっている。

気持ち悪いのだが、どうも寝起きにこんなドッキリやられると驚  
きで固まってしまうようで、いや思考はどうもさっきから回るのだ  
けど、なんなんだこれ。なんなんだこれ。カメラはどこだ、氷で撫

で回してくれてる奴はどこだ？　うわ動いてる動いてる、蛇か蛇なのか？　蛇っぽいって！

「っヴおうあっ！」

我ながらどうかと思う奇声をあげながら、慌てて布団から飛び出し、首に巻きついてるものを引き剥がして投げつける。

木にべちつと当たってその30センチほどの蛇はカサカサと慌てて茂みに逃げ込んだ。

「……お、お、驚えたー………て……あ？」

ぜーはー荒げた息を落ち着ける暇もない。

何せ見ている目の前の光景が光景だ。

「……森？」

そりやもう立派な森だった。

樗、ブナ、檜。人の手が入っていないのだろう雑木がひしめき、ツタが絡まりあっている。

振り返って後ろを見してみる。

「布団だな」

さっき慌てて飛び出したせいかぐしゃぐしゃになった布団がある。それは別段おかしくない。

地面の上に直敷きしてあるのを除けば。

その向こうに10mほどの澄んだ池があつて、そこから手前は花が咲き乱れ、ザ・草原と言った感じののどかな風景になっているのを除けば。

先ほどまで変な夢を見ていたことを思い出す。

「また夢か？」

夢を夢と認識できるのって明晰夢というのだったか。

初めて見たかもしれない。しかし、蛇で目覚める明晰夢って、夢占いにかけてたらエライ酷い結果が出そうだ。

なんとなく、池の方に歩いてみる。

物語だと池の中から美人が出てきたりとか、未来の知識を映したりとかかな？

だが、覗き込んでみると、映し出されたのは。

「なんだこの子供……」

見たことない子供だった。

俺が右手を上げるとその子供は左手を上げる。

俺が左手であいーんのポーズをとれば、その子供は右手であいーんをした。

……いや夢なんだから百歩譲って子供になるのはいい。回帰の欲求なんて誰にでもあるし。

でもこの姿はねえよ。

「アルビノ銀髪オッドアイとか……」

こんな欲求が俺にあったのかー。厨二なのかー。中学の時に発症しなかったのが悪かったのかー。

少し逃避気味な思考が揺れる。

この調子だと邪気眼とか隠された人格とか黒翼の堕天使とかそういうのまで搭載されて……と、翼とか思い浮かべた時だった。

「ぶぶつ……おうふ……息ぐる……し……ぐあぁ」

寝巻きに着てたジャージの背中がなんだかもこもこって動いて盛り上がって、てか狭い。狭い！ 必然首が絞まって、締まる締まる締まる。ぐおお……

限界点に突破しようという時、びりべりばりりと、ジャージの背中が破けはじめ。なんと翼が……

「生えた……」

なにそれ怖い。

色は真っ白でもふもふ具合はなかなか良さそうだが、いや漆黒の堕天使とかにならずに済んで良かった……のか？ え？ えー？ いやなんだろうこれは。

うん。明日聞いてみよう夢占い。

こんな力オスな夢は何というかすごすぎる。

いい年した男がとか、ふっと思っただが、いやコレだけの夢だと十分話しのネタになる。

ひとまずこれからすべきことは。

「寝るべ……」

いそいそと布団を直し、もぐりこむ。

固く眼をつむり布団を頭から被る。

翼が邪魔になるようなので横向きに体を丸めて。

なんだか……いろいろなんだか……夢でも脳は疲れてたのかもしれない。

きつとそうだ、新作メニューの仕込みで徹夜なんかするからこんな夢を見るんだな。

何も考えなくなかったただけかもしれないが。今度こそちゃんと真

つ  
当に現実を目を覚ましますようにと祈る。  
急速にぼんやりしてきて…………意識を手放した。

## 一話

今日は本当に酷い夢を見た。

寝ぼけて誰かに応対しちゃったなーと思ったら、草原で目覚めて、自分がどこかの厨二小説などでよく見かけるような特徴を兼ね備えたりしていて。

あまつさえ翼とかもこと元気に生えて、なにこのキメラ。いや天使ってよく考えたら人と鳥のキメラだよねとか思ったり思わなかったりした。

——そんな夢を見たのさ。

「で、終わりになればよかったのに」

そんな夢、いや悪夢は際限なく、容赦なく、否応もなく続行中だった。

流石にあれだけ寝たらもう寝ることも出来ない。

恐らく今は昼。

なんたつて太陽がいい具合に有頂天。俺の心も温かく照らしてくればいいのに。

ため息が先ほどから連続して出ています。

なぜため息がでるかというと先ほどから嫌な予感がするわけで。

それは股間でむずむずしてるわけで。

いやただの尿意なんですけどね。

とてつもなく嫌な予感しかない。

「そうだ、小便行こう」

京都行こうみたいなノリであえて軽く逝ってみる。誤字ではない。これは逝くが正しいのだ。

ちよつくら木陰に立つて、まあ、寝巻きのジャージのままなので下ろさせてもらいます。

トランクスもちよつと下ろしてみまして、また戻して。

「見なかったことにしてえ……」

涙が溢れた。

なんたって、長年付き添ってくれた我が相棒が。マイ・サンが。愛すべきエツフェル塔が。ビッグダディが。ごめん嘘ついたビッグって程じゃない。

「……………無あい……………」

へそまで届くようなご立派なもんじゃなかったけど。

毎朝自己主張してくれて、時にはちよつと困ったちゃんだった愛息。その姿が影も形も。

小さくなってたとか、しぼんでるとか腹の中に納まるという空手の奥義とかでなく。見事に玉も無い。

明日のジョーが灰になるような心境。

俺は灰になるという感覚を生まれて初めてその身に刻んだ。

思考停止とは便利な言葉だと思う。

応用範囲も広く、例えば誰もが考えてなかった事なのに、いざ政治家がそれで間違えればだれそれは思考停止に陥っていたことを反省しなければ云々なんぞと叩かれたりもする。

ただ時には、精神的に追い詰まっている時などにはこの思考停止というものは切実に必要となるものらしい。

性転換とかなんかクレバスがあったとかそんなんは思考のダムに

止めて考えないことにした。考えないったら考えない。

なんで、とか、どうして、とかは時間のある時にゆっくりゲームでもしながら考えればいいことだ。

『まず、もしもという時は状況に適した優先順位を付けて判断することだ』

そんな台詞を迷彩服を着ながら俺に語った親父を思い出す。

別にアフガン帰りの軍人とかベトナム帰りのグリーンベレーとかではなく、至って普通のサバゲーマニアである。

だが、マニアというものはこだわりも大きいのか、思い出すと、どこの軍事教練だよという知識もある。

「ひとまず目先のことを考えよう。それがいい、それに決めた」

本当に思考停止とはありがたい。

何しろほんと投げ出された五里霧中。何がどうしてどうなったという脈絡もなく、順序もなく、訳が判らない状態だ。……この場合の優先順位はというと、自己診断、状況把握だろうか。

気を取り直して、後方の静穏という名前が付きそうな池に向かう。上流から流れ込んでいる小さな川がせき止められて直径10mほどの池のようなものになっているようだ。岩がごろごろあるわけでもない、それほど溪流というわけでもないようだ。

水に触ってみるとかなりの冷水であることが判る。近いところに湧き水の源流があるせいなのだろう。

水面に映るアレな姿を見てため息を落とすも、いつまでもじっとしているわけにも行かないので、勢いよく水面に顔をつける。

「……ふぁー冷てえ」

いい感じにすつきりしてきた。

拭くものもないので、破れたジャージの上着で拭う。化繊は水の吸いが悪いがこの際仕方ない。

「さあて、まずは……」

自己診断。これはあまり考えたくないが、否定しても仕方ない。

この、明らかに日本人らしからぬスラブ系というか、ロシア人と言われて思い描く典型のような顔立ちで、銀髪オッドアイの痛い容姿の人物は俺ということらしい。

髪のは長さはあまり変わってない。耳が隠れるか隠れない程度のショートで、割とざんばりんと切つてある。

色はもう笑うしかないようなプラチナブロンド。さらさらの直毛である。アーモンド型の大きな目に高くて通った鼻梁。色白というか色素ねえだろというくらい白い肌。血の色が透けて見えるので冷水で刺激受けた頬は今ピンク色だが。うわぁ。

くじけるな俺。イタくてもくじけるな。がんばれ、やればできる。俺はできる子だ。自己暗示をかけて再起動する。

目は左目が琥珀、右目が青。金目銀目という奴のようだ。瞬きを二回。水面に映る姿も瞬きを二回。睫長い。爪楊枝8本乗せがいけそうな感じである。

いやまぁ、そこまでは人間の範疇だ。それはいい。よくはないけどいい。

背中感触が問題だ。この至って普通に生えてる翼。なんだろうが、背中に腕でもついているかのよう。天津飯の四妖拳、背中に腕が生えて手数が増える技だったか。そんなのを思い出す。

腕とは大分関節の付き方が違うが、何というか、当たり前前に普通に動かすことができる。手の平をパーにするような感覚で翼がばさーと開いたり。ぐつとすると折り畳めるとも言えいいのか。…いかん、ぐつとしすぎたら攣った……うおお、痛え……びくびく

する羽根が微妙な気持ちを増幅する。

……どうしようか、大分人間辞めてしまっている気がする。この上さらに額に目でも出来たら、目も当てられない。というか人目に当たりたくない。幻想郷とでも立て札に書いて山に引き籠もるしかない。

落ち着こう、落ち着こう。深呼吸を数回して強引に落ち着く。

ともあれ、この羽根の長さは目一杯広げると片羽根で2メートルくらいか、そのくらいまでは広がる。両方広げれば、俺は体長4メートルの霊長類ということになる。いや、羽根生えてるから鳥類なのか？ 混ざって霊鳥類？ やめよう。なんだかCOMPとか持つてる人に使役されそうだ。コンゴトモヨロシクとか言う気はない。

そして、体を動かすのにまるきり違和感がなかったので気付かなかったのだが。……縮んでいる。洗濯機にかけられたニットのセーターのように縮んでいる。具体的には三分の二くらいに小さく。今の身長は120センチと言ったところだろうか。手足の長さも短く、手の平に至っては何というプニ具合。マシユマロと勝負が張れそうだった。……何というか子供にしか見えない。いや認めよう、今の俺は子供の体であると。認めざるを得ない。よし、自己診断はひとまずこれで……。

と、そこまでが俺の限界だった。

「ありえん……ありえん……」

頭をかかえてうずくまる。

夢だろ醒める醒める醒める。

「うあー……」

そんな自己診断にも思考停止という名の蓋をして、のろのろと立ち上がる。

今の俺を誰かが見れば、レイプ目というものを拝めたかもしれないかった。

「まあ、なんだ……状況、把握せんと……」

既にグロッキーです。

ギブアップボタンかナースコールがあれば連打していると思う。リングにタオル投げていいならセコンドに百本はタオル投げさせる。と言っても、いつまでこの状態でも仕方ないので。

大きく息を吸って吐く。頬に両手でビンタで気合を入れ。

「……痛うあ！」

思ったより力があつた。というか歯で口の中を切ってしまった。

ひりひりするが、これはこれで気が紛れたので良しとする。

まずやる事は……

あたりを一通り探索した、あまり詳しいわけでないが、植生、また、木に付いている獣毛をチェック、危険な動物がいないかを確認する。一応熊避けに一定感覚で音を鳴らしている。

円を書くように池の周囲を軽く探索した後は、歩きやすそうな、木々の隙間の多い場所を縫って、放射状に探索をする。

迷わないように石でサインを残しながら木々の間を歩いていく。

『森歩きは急いではならない。落ち葉に隠れて穴があるなどにはよくある事だ、大雑把な■の事だ。注意しろよ』ふとまた、変人親父殿の台詞を思い出す。大雑把は自分だろうに、よく俺の事をそうけなしていたものだ。

……確かに、連絡手段もない今、怪我をしたら笑い話にもならない。ゆっくり着実に歩みを進める。——1時間も歩いた頃だろうか。唐突に森を抜けた。

「……おおう」

感嘆が出てきてしまった。

森を抜けたと思ったら切り立った小高い崖になっていた。

クライマーでもないのに降りられる自信はないのだが、そこから見渡せる風景こそが有りがたいものだった。

街である。

距離は10キロメートル程だろうか。昼間というのに車も行き交い、それなりに活気のありそうな雰囲気である。中心部と言えそうな所にはビルが立ち並び、俺から見て左側は緩やかな湾となつて、海に面した公園や、倉庫街が広がっているようだった。

港湾都市と言えはいいのだろうか、ひとまず、おおまかな方角だけ確かめ、別ルートで近づいてみる事にする。

太陽が出てるうちなら、おおまかな方角だけは判る。

日が暮れる前には街に着きたいな、と疲れる足を持ち上げてまたゆっくり歩きはじめた。

「ついた……」

やっと森の切れ目というか、人里につながる道路が見えた。人家も見える。

どうやら山間の住宅街のような所に出たらしい。

途中で拾った手頃な木の枝を杖にして、ぐてーっとへたりこむ。空を見ると既に夕方。

木苺とか見かける度にちよこちよこ食っていたものの、流石に腹も減る。カロリーが足りない。

とはいえ、疲れているのは精神的な部分らしく、体は妙なことにあまり疲労を感じていなかったりする。3時間以上も道無き道を山

歩きすれば成人男性でも鍛えてない限り疲れは感じると思うのだが。そのあたりの感覚の違いというのがまた少々気持ち悪い。脳が体の動かし方を理解していないような気さえする。……考えるどつばにはまりそうなので、これも考えないことにするのだが。

「さて、とりあえず交番にで……も……？」

俺は自分の今の容姿を思い出して頭を抱えた。

「どこの世界に羽根生やした子供がいるんだよ……身分証明だって出来ねえし、前とは見た目も全く違うし……」

住所不明、戸籍不明、世界に類を見ない類の奇形を持った、保護者もない子供である。

最悪の場合、闇社会で流通ルートとか、どこのバッドエンドですか。

悪い方向に考えるとキリがない。

ただ、この見た目で目立ちたくもないし、人目を忍んで家族に連絡、かね？

何しろ格好も普通に恥ずかしいのである。

羽根出す時に、上着は破れて、背中で結んでいる状態。

泥で汚れたジャージに、靴など当然ないので泥だらけの靴下。

背中から生えてる白い羽根。

どこの違法研究所から逃げ出してきたの？　とか言われそうだ。

ライトノベルなら。

そんな事をつらつらと考えながら、意識して人家から距離をとって歩く。

時間としてはもう夕方を過ぎて、暗くなりかけている。

先ほどまでちらほらと帰宅する小学生が見えたのだが、そろそろ夕食と団欒の時間ということなのだろう。

実のところ。

「飯の臭いが漂ってきて腹が……」

今の俺の姿を見る人が見れば、ザ・シヨンボリというタイトルで写真撮ってくれるんじゃないだろうか。せつない。空腹時に美味そうないせつない。マツチ売りの少女も確か、空腹なのに七面鳥を食べる家庭を夢見ているなんて描写があっただけ……判る、判るぞ少女よ。食いたいなあロースト七面鳥。中はジューシー、外はカリカリ。バジルとオリーブの香りがぷーん。

「うぐあ、とんでもないものを想像してしまった……腹減った……もう、性犯罪者のロリペド野郎でもいいから見た目に釣られて飯くれんだろつか……」

実際に襲ってきたらねじり潰すが。何をとは言わない。

自己主張を繰り返す胃袋を抑えて、人気のない公園があったのでとりあえず水で腹を満たす。日本はすばらしい、水道水が飲み放題だ。涙が出そうになっているのはきつと気のせいだ。

とりあえず水分補給したせいか、多少は余裕がでてきた。

一つ思った事があり、公園に設置されている自動販売機の下をよーく見る。普通なら懐中電灯で照らさないと見えないところだが、目をこらす。発見。そこらへんの枝で手繰り寄せる。

10円硬貨をゲットした。100円硬貨を2枚ゲットした。本当は届けないと遺失物横領になるのだが、非常時なので堪忍してもらう。

自分自身でよく判っていない部分も多いのだが、どうもこの子供ボデイ、やたらスペックが高い。

夜目が利くわ、力強いわ、スタミナはあるわ、人の気配だの臭いにも敏感だったりする。

野生動物にでもなってしまった気分だが、羽根生えた妖怪とでも思えばおかしくないのかもしれない。妖怪……そんな事思いつく時点で段々俺の常識も壊れているようではあるが。

ともあれ、使えるものは使う。

何より、これで電話が使えるのが大きい。

というわけで早速公園の公衆電話で、硬貨投入。自宅の電話番号をプッシュプッシュ。

しかし、いまだにこの昔ながらの緑色公衆電話が残っているというのは懐かしさをそそる。

「携帯が出回ってからはめっきり見なくなったからなー」

今となればこの電話ボックスのべたべた貼られている、教育に非常に悪いピンクチラシも懐かしい。

プッシュし終わると、数秒の時間の後こう言われた。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

心臓が早鐘を打つ。

「間違えた？」

再度硬貨を入れてゆっくり口で確認しながらプッシュ。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

動悸が止まらない。なのに血の気が顔から引くのが判った。

三度、四度掛け直す。頭で番号が間違っていないか、思い出しなが

ら。

しかし、つながらない。

隣近所の……小学生の時から幼馴染、腐れ縁といってもいいかもしれない。奴のところに電話をかける。

今度もつながらなかったらどうしようか、と少し指が震えた。

数秒待つと、電話のトルルルというコール音。

大きく息を吐いた。やがて、ガチャと音が響き相手が出る。

「はい、溝呂木です」

若い女性の声ではつきりそう言われた。

「溝呂木さん……ですか？　——でなく……」

「はい、違いますよ？　お間違えでしたか？」

すいません間違えました、と言って切ったが、声はかすれて届かなかったかもしれない。

動悸が激しくなる。

冷や汗が止まらない。

ふと目が備え付けの電話帳に留まった。

探す。

覚えている限りの近所の新聞屋の名前、工務店の名前、工場の名前、魚屋の、小さい服屋の、行きつけの喫茶の、よく買いものに行くスポーツ洋品店の、腐れ縁の友人が大好きなゲームセンターの。

一致する店が存在しなかった。

それどころか、以前住んでいた、町の名前そのものが見当たらない。

判らない。何でこうなったのかが判らない。得体の知れない恐怖がこみ上げてくる。

唯一つ判るのは。

「……はは。やべえ……本格的にやべえ」

人との繋がりが何一つない、本当の意味で孤独という事だった。

気が付いたら、最初目を覚ました時と同じ場所に帰って来ていた。顔はぐちゃぐちゃで涙だか汗だか鼻水だか判らない感じにグロくなってしまうているようだった。

「……ああ……あー、はあ……」

なんだか、頭がぐらつく。池の水で顔をばしゃばしゃゆすいでもりあえずグロさを直す。

後ろを見れば俺と唯一つだけ、つながりのある布団。探索する時に枝に干しておいたものが目に止まる。

その月明かりに照らされた青白い布団が、なんともシユールで皮肉で滑稽に思われて。

「……あー、本格的に駄目だ。精神的に病んでそうだな俺……。ぷっ……くくッかつ……ぎやははは！」

笑いがこみ上げてくるなんて。

腹が痛くなるほど地面を転げまわって笑って、笑って、笑って。真っ白な羽根がドロドロになるまで転げまわって。

発作のように止まらない笑いの衝動が収まったのは、池にダイブして一通り泳ぎまわった後だった。

魚くんたち驚かせてごめん。おいちゃんも疲れてんのさ。

冷たい水の中でぶかぶか浮かびながら月を眺める。

眺めながら考える。

なんとなく、今まで気にしててもあえて考えなかった事を考える。

「俺の名前……なんだったけかなー……」

アルファベットで3文字、漢字で1文字だったと思った。

ただ、いくら思い返しても、墨汁をたらしてふきとったかのように曖昧になってしまう。

年齢も同様だった。

気付かないようにしていた。でもここまで考えるとどうしても気付いてしまう。

記憶の中のサバゲーマニアで破天荒で適当な親父も。

インドアでドラマに一喜一憂する妙にホットケーキが上手い母も。子供の頃からエアガンで遊んでいたらいつの間にかガンオタからアニオタへ変異していた隣の悪友も。

記憶はあるのに、思い出がない。顔も思い出せない。言葉は思い出せるのに。

水彩絵の具で描いた絵に水をぶちまけたかのようにぼかされている。

「……あー、うつだしのう」

ごぼんと池に潜ってみる。沈む、沈む。あまり深いわけじゃないが、このまま沈めば底なし沼のように飲み込んでくれないだろうか。このボディだと水の中でも隅々まで見渡せる。

水底でザリガニが威嚇していた。指を目の前に出すと挟もうとしてくる。かわしてつつく。挟もうとする。かわしてつつく。かわしてつつく。逃げようとするので背中をキャッチ。捕まえた。

卵を大事そうに抱えている。声が出せるならしゃぎーとも言出しそうな感じに怒っている。

なんだか力がいろいろ抜けた。

ザリガニは手放す。

水面に顔を出して息を吸い込む。

手のように自在に動かせるようになった羽根でばちゃばちゃと泳ぐ。バタ足の要領だ。バタ羽根？

水から上がって羽根の水を切る。絞った上着で体を拭う。開き直った。

そもそもそんなに深く悩むのがとても苦手な方なのだ。多分。落ち込むだけ落ち込んだら後は寝るだけ。

ひっかけておいた布団を草の上に敷き、虫除けの松葉を周囲に散らす。

明日は早くに起きてみよう。

そんな事を思いながら、すっかり馴れた翼にくるまって、上に布団を被る。

今は涼しいようだからいいけど、夏は暑苦しいかもしれない。そんな事を思いながら意識は薄れていった。

## 二話

流石に三回も同じ風景を起き抜けに見てしまうと、夢オチという現実逃避も成功しない。

そんな事を思いながら目覚めた朝だった。

思い切り伸びをしてコリをほぐす。空はまだ薄暗く、朝もやがかり、空気はひんやりとしていた。

気の早いキジがどこかでキエー、キエーと威勢のいい声をあげている。

昨日は混乱して騒いで泣いて寝て、何とか感情は落ち着いた。実は落ち着いてないけど、今は置いておき、今日やること、やるべきことを思い浮かべる。

「衣、食、住。それに情報か」

考えてみたら、昨日見た、港湾都市っぽい街の名前も確認していなかった。本当にせつぱつまつてたようだ。

今自分がどの場所に居るかぐらいは確認しないと。いや、ここは本当に日本なのか。日本に良く似たパラレルワールドとかの方が余程安心する。

ただ、とりあえずの方針は決まった。まずは――

前方のブロックの壁に隠れて息を殺す。

周囲からは生い茂るツツジに隠れて、この小さい身は周囲からは完全に見えなくなっているはずだ。

出勤する父親と思わしき人達に、母親と思わしき人達。それに全体的に見かける子供は幼稚園か保育園、あるいは小学生が多い。年

齡が高くて中学生といったところか。

昨日確認した住宅街は、やはり思っていた通りの家が多かったようだ。

山に近く、新築が多く、道に沿って一戸一戸の土地が整備されていた。

一つ一つの土地そのものはやたら広いというわけでもなく、恐らく都市計画で整備された分譲地なのだろう。

こういう場所は若い夫婦が集まりやすく、当然子供も多くなる。さらに小さい子供は成長が早く、衣服などはほぼ使い捨てに近い状態になってしまうことも多い。

やがて、人通りが少なくなり、全く人が居なくなつたのを見計らい。俺は目当てのものをかつさらって、そのまま走り去る。

50メートル先の森に向かい獲物を抱え、風になる。

森に飛び込み、先にマークしておいた安全地帯、——大きな木のウロがあり、隠れるのに調度良かった。ところまで行き着き、大きく息を吐いた。

「見られないでよかった……」

何せ今の自分の格好といったら、ヨレたジャージの下と、すりきれたソックス。上半身は上着というよりボロ。ついでに翼付き。こんなのが後生大事に半透明袋を抱えて全力疾走してる姿とか見られたら、なんというか……死ななくても大事なものが磨り減ってしまいそうだった。既にいろいろ遅い気もするが、せめて羞恥心だけは人並みにとっておきたかったのだ。

息を整え、さらった獲物を確認する。

そう、今日はどうやら燃えるゴミの日らしかった。

選んだ獲物はこの服がたっぷり詰まったゴミ袋。子供向けの服もそれなりに詰まっていそうだった。

ほくほくと中身を確認し、使えそうなものを選び分けていく。

——整理中、整理中、整理中。

うん……なかなかの物がゲットできた。

大人の大きさのワイシャツ、サイズが合わなくなって捨てることになったのだろう、あまり汚れもない。

普通のＴシャツ３枚、子供にサイズが合わなくなったようだ。デザインが……某ネズミのキャラ物なのがちょっとアレだが。今の身体にぴったりののが悔しい。

それに未使用のタオルが出てきたのには驚いた。貰い物で、余ってしまったのだろうが、なんとも勿体無いものだった。ともあれ、有り難く使わせてもらうが。

嬉しかったのは運動靴が。少し大きいが、十分履ける。裏にガムが付いてたが。今の親はこのくらいでも捨ててしまうのだな。ともあれ、履物は嬉しい。今まで靴下で外歩きだから、大分足に傷も出来てしまっていた。早速ガムを枝で削り落として履かせてもらう。

……妙なものも大分出てきたというか、使用済みと強く自己主張しているかのような、何かカペカペになっているセーラー服とか大人用スクール水着とか。蠟のついた麻縄とか。うんまあ、地面に埋めて証拠隠滅しておこう。というかこういうものはせめて紙袋で隠してからゴミに出したほうがいいと思うが……うん、ゴミ泥棒が言えることじゃないな。

少々げんなりとしつつも整理を終え、ひとまずこれで身支度を整えることができそうだ。一発目のゴミ袋でこれだけの当たりというものも相当に運が良かった。衣類が調達できるまで数回は同じことを繰り返すのを覚悟していたので幸先の良さに鼻歌が出てしまいそうになる。

最早、上着というよりボロか布切れと形容しなくてはならないジヤージを脱ぎ捨て、ワイシャツを羽織る。この大人サイズのワイシヤツなら、翼をきっちり折り畳めば……

「……おうあつててててててっ」

羽根が攣ってしまった。悶えながら突発的に思いついたあの台詞が何とはなしに口から出てしまった。

「ぐうつ……白翼を持たぬものには判るまい……」

……痛みは紛らわせたものの、周囲に誰もいないというのに万が一を考えキョロキョロ見回し、一人赤面してしまった。いやホント、何言ってるんのよ俺。

「うし、これでよし！」

身支度を整え……ズボンに類するものは無かったので元のヨレたジャージのままで、せめてもと、くつついた埃だのゴミクスだのを綺麗に払って、準備は完了。ぶかぶかのワイシャツで翼を隠すことも何とかできているようだ。力入れてないともこもこしてくるの、それなりに大変だが、背に腹は代えられない。

思わず走り出しそうになってしまつ足を押さえながら、早足で街につながる道路に踏み出した。

向かう場所は高台から確認した総合デパート。征く戦場は地下一階食品売り場。

——さあ、試食品の貯蔵は充分か？

「……はっ！」

何か、イタい思考が混入した気がする。

身体に影響されて精神年齢が下がっているんだ。そうなんだ。絶対そうだ。理論武装は完璧だ。嘘だごめん。

頭をぶんぶん振って、とりとめのなくなった思考を追い出す。  
なんだかんだで、自己主張を繰り返す胃袋には逆らえず、途中から駆け足になってしまった。

いつの間にやら目的地に到着していた。

「……はらへった……はらへった……はらへった……」

ヨダレが口から溢れそうになってしまう。

なにやら凄い顔をしていたのかもしれない。

目の合ったサービスカウンターの人に、全力で視線を逸らされた。  
ああ、まあいい。そんなものは些事だ。

なにしろこちら、ココのところまともに食べてない。

地下へ続くエスカレーターを下り、試食品と思わしき肉を焼く香りが漂う。胃袋が際限なく自己主張を繰り返し、口の中にヨダレが充満する。

俺はごくりと溜まったヨダレを飲み込み、息を整え、『食欲』という名の人間三大欲の一つを全力で解き放った。

台風一過。

まさにその四字熟語がふさわしいかもしれない。

多くは語らない。ただ、一言だけ。

デパ地下の従業員さん、試食荒らしの事、本当にごめんなさい。

いずれ、金持ちになったら、この店でたっぷり散財しよう。

やっと満たされた腹を抱え、久しぶりに余裕のある気持ちで散策をする。

メインストリートというほどではないのだろうが、それなりに広い道に街路樹が植わり、ぽつぽつと散発的に小さな店が並ぶ。商店街があるとしたらその端のあたりなのだろう。腹ごなしにのんびり

散歩するにはぴったりの場所だった。

ただ、先ほどは食に夢中だったのもあって気にしなかったのだが、道行く人がちらちらとこちらを見てくる。と言っても、犬に散歩させているお爺さんとお婆さんくらいしか見かけなかったが。

やはり目立つのだろう……白人にしても真っ白な肌に銀髪でオツドアイ。小汚い格好。俺もそんなの見かけたら驚く。

ふと思い立って、人通りの多そうな方に向かう。少し前にちらつとメインストリートっぽい通りを見かけたのだ。そこは昼前というのにそれなりに人が歩いているようだった。

自分自身がどのくらい目立つかを把握しておこうかと思つての事だった。

「う……」

呻いてしまった。その通りを歩き始めて数分にも満たない時のことだ。

どうにも視線が刺さる刺さる。以前は全くこんな経験がなかったので、一目散に逃げたい衝動が心でもたげる。

とはいえ、変な格好の外人の子が歩いてる、程度の認識で済ませてくださいらしく、一番緊張したお巡りさんの傍を通る時も、訝しげな顔をしたもののスルーしてくれた。

日本人の事なかれ主義に感謝。

ともあれ、やっと、というかようやくというか。現在地が判明した。

いや道路の案内標識に『海鳴駅2km』と書いてあるわけで。よくよく見れば、道路沿いの標識にも市名が書いてあるわけで。

……俺は本当に今の今まで余裕を無くしていたらしい。というか自分の間抜け具合に膝が折れそうになった。頭を抱えて振り乱したくなった。この調子だと、何か他にもあほな事やってんじゃないのかと心配になった。

と、ともあれ、次のことを考えることにする。思い悩んでも仕方ない事はあるのだ。

衣食はなんとかあったので、次は住だ。

と言ってもこれはあまり心配していない。季節柄はどうも春と夏の合間らしく、野宿も難しくないシーズンだったからというのもある。長い目で見ればどうかと思うが当座は何とでもなるだろう。

ひたすら足で探そうかとも思ったが、ふっと思いついたこともあり、前に高台から一望した時に見えた銭湯に向かう。目当ては昨日拾ったなけなしの小銭で一つ風呂……といきたい所だが違う。ああ、コーヒー牛乳が恋しい。腰に手を当て、親父飲みたい。いや童心に帰ってイチゴ牛乳もなかなか……。

と、思考が逸れた。狙いはその高い煙突にある。昔ながらの銭湯の近所の子供なら一度や二度はよじ登って怒られたであろうあれだ。街の中から町並みを一望すれば、あるいは雨風のしのげそうな廃屋でも見つかるかもしれない。

結果から言えば、想像の斜め上のものが見つかった。

しかし、煙突に登って見回していたら、銭湯のおっさんに見つかってしまい、こっぴどく怒られたのは置いておく。

気を取り直し、見つけたお目当ての方に向かった。

方向としては元来た方向、俺が最初から居た山林の方向だ。

山と街の中間のような場所、通りから少し外れた側道に、周囲の田園風景とはまるで場違いなようなそうでないような、こんもりとした雑木林がでんと構えていた。

周囲は錆び錆びのフェンスに囲われ、とりあえずの境界を作っている。

入り口と思わしき鉄の門には、年代ものの鎖が張られ、封鎖されている。ところどころが割れ、雑草が生い茂るアスファルトの道が

その雑木林の中に続いていた。

「放置されて、ウン十年は経ってそうだな……こりゃ」

おじゃましまーすと小声で呟いて、1メートル少々の高さの門を飛び越える。

もはや山道と言ってもおかしくないようなボロボロの道を歩く事5分。ちょこちょこ曲がりながら、300メートルも道なりに歩いた頃だったろうか。建物が見えてくる。

「……到着ーと。しかしこりゃまた……雰囲気のあることで」

思わず一人ごちてしまう。これは無理もないと思う。じやりじやり音を立てながら見て回る、靴を拾えて本当によかった。

塗装も落ち、虫食いのように穴が開いているトタン屋根。劣化しめてくれ上がっている外装。ところどころで剥げ落ちて鉄筋しか残っていない場所すらある。

窓ガラスがかろうじて残っているのが奇跡のようなものか。床には落剥した破片だのなんだのとわからないものがビスキットのカスのように散らばっている。

最近流行りになっていいるらしい、廃墟巡りのコミュニティサイトに投稿したくなるような、立派な廃工場だった。

工場そのものの敷地も相当広く、かつては相当大口の仕事もしていたのだろぅ事は想像できる。今は工場の中身はがらんどぅなので、どういった業種かは定かではないが。

ともあれ。

「あてが外れた……」

ちよつと落胆する。遠目で見た限りではそれなりにボロくも屋根、

壁が見えたので、雨風はしのげるとは思っていたのだが。間近に来て見ると劣化が酷い。

これは、雨でも降ってきたら、神社の軒下でも借りるか？ いや、考えてみたらこの子供ボデイなら泣き落として泊めてもらえるんじゃない？ 泣き落としとか正直ないな、却下。

などと、益体も無い事をつらつらと考えながらも、工場の探索を続ける。

と言ってもそう複雑な作りになっているわけでもなく、何のひねりもない箱型の建屋なのでそう見るところもないのだが。

外に出て、ぐるっと周ってみると、どうも最初に見えた一番大きい建屋だけではなく並行して二の字を描くように工場建屋が並んでいるようだった。

だが、さらにその奥にある小さな建物に目を惹かれる。

もしかしたら、工場の事務所あるいは休憩所として使われていたのかもしれない、工場の建屋より随分手のかかってそうな小屋がそっくり残されていた。

あてが外れたなんて言つてごめん。これは大当たりだったかもしれない。

入り口の戸はさすがに体を成さずに外に倒れこんでいるものの、おもむろに覗き込んでみれば、6畳ほどの土間……というかコンクリートが打ちっぱなしになっているだけだが、その中央に昔のダルマストーブが鎮座し、壁際には食器棚らしきものが置かれ、その近くに木製の椅子が無造作に積み重ねてある。

土間の奥には板張りの床になっている部分が4畳ほど。仮眠用のスペースのようだ。

うん。間違いなくこの工場の休憩所だったようだ。小さい作りのためか、屋根のトタンも幸い目立つ穴は開いていない。壁にいたつては、憩いの施設だけとは奮発したのか、鉄筋コンクリート作りの上に板を張っている。

ともあれ、これで住の問題もなんとか目処が立ちそうだった。不

法侵入には申し訳ないが目をつぶってもらおうとしよう。元々が放置されてる物件でもあることだし。

そして、ねぐらが決まれば、やるべき事はいくつも思い浮かぶ。

「まずは掃除……だなあー」

コンクリートの床に積もった凄まじい埃をうかつに散らしてしまい、むずむずする鼻を押さえて呟いた。

工場に掃除に使えそうなものでも落ちてるといいんだが……

いざとなれば、箒はそこらの枝でも束ねればいいし、雑巾は朝拾ったゴミの中から使えそうにもない服を使えばいい。

昨日とは一転して上機嫌な自分に苦笑が出そうになる。いや、でた。

「くふふ」

思ったより気持ち悪い含み笑いだった。

どうやら俺はトム・ソーヤーかロビンソン・クルーソーの真似でもしていれば、こんな訳の判らない状況でも楽しめるらしい。

全くもって現金な事この上なかった。

### 三話

運良くねぐらを確保できてからは、掃除したり、痛んだ部分を修理したりで瞬く間に二日が過ぎた。

それなりに状態が良かったと言っても、元が廃屋なのには違いなので、手がかかることかかること。それなりにお金があればきちり修理してやりたいのだが、今は廃工場に転がっている雑多なものを組み合わせてなんとかやりくりしている。

例えば、錆びて穴が空きはじめている天井には工場の建屋で落っこちていた丁度いいトタンの破片を上から張り合わせている。接着剤はあちこちで使われていた樹脂を煮溶かしたものだ。

窓も一応あるにはあるが、窓ガラスが全損の状態だったので、これも工場内のまだ無事だった窓を移植。サイズが合わなかったので打ち付けてしまった。枠が木枠だと加工が楽でいい。

床板はかなり朽ちていたので、全て剥がし、コンクリートの地肌がむき出しになっている。今は拾ってきたダンボールを数枚敷いているが、いずれ無事そうな板材でも見つけたら張るのもいいかもしれない。

工場でもかなりの掘り出しものが見つかった。工具箱がそのまま見つかり、開けてみれば、酷い錆びの生えた工具もあったものの、それなりに使えるレベルのものもあった。例えば今、頑張つて研磨している小刀もその一つだ。幸い、砥石も普通に見つかったのてこうして研いでいるのだが、ここまで錆び錆びだったものを実用レベルまでするというのもなかなか手間の要ることではある。

一時間ほども費やし、それなりに研がれた小刀を懐に入れ、食料調達に行くことにした。

近場のデパートはこのところ試食品を散々荒らしてしまったので、さすがに行きにくい。というかそろそろ目をつけられているよなのだ。と言ってもあからさまに怪しい子供なので、目をつけら

れないはずもないと思うが。そんなわけで今日は野で食料調達なのだ。

オラオラオラオラオラオラ！

ラッシュを叩き込む。その陽光照り返す水面に向かい、ひたすら、殴る、殴る、殴る。

君が！ 泣くまで！ 殴るのを止めない！

そのくらいハイテンションで暴れるのが効率がいいのだ。この魚は。誰かがこの姿を見ればなんて考えない。考えないったら考えない。

川の上流からそうやって暴れながら下流にゆっくり移動していけば、魚が追い立てられ、前もって石でせき止められているので、唯一の逃げ場所には網。

追い立て漁と言われるやり方だ。ちなみに網はけなしの拾った硬貨で買ったダイ。ーの洗濯ネットである。洗濯機の中で盛大に回されるのが前提の作りなので丈夫さは信用がおけるのだ。

追い込み終わって、網を回収してみるとなかなかの成果だった。知識だけで、やってみるのは初めてだったが上手くいったようだ。

「んー、ヤマメ、ハヤ……おお、こりゃカジカか。ニジマス多いな、放流でもした後だったか？」

あの最初に見た池の上流がこんなにいい感じに漁場になっていたというのは有り難いと同時に思わぬ誤算でもあった。

こういったいい感じの漁場はすでに漁協で管理されていて、今やっているようなことは露骨に漁場荒らしなのである。地元の漁業関係者さん、ごめんなさい。……うんまあ、見つかったら逃げるか。遊漁料払えないし。

とりあえず、まだ育っていない魚は放して、それなりの大きさの魚だけ頂くとしよう。

魚は内蔵から傷むので、ワタとエラをその場で抜いて、熊笹でくるむ。

ついでに、川辺に生えているクレソンと行きがけに目についたマダケの筍を摘んで帰る。……コゴミも発見。いやはやい時期だ。む……あれは、ウドか。ゲットゲット。

ここでも洗濯ネット大活躍である。袋代わりに丁度いいのだ。食材が蒸れないし。

一通り山の幸を収穫し、ほくほくと帰宅したのだが。

「塩買えばよかった……」

調味料がないことを思い出し、地に手をついてうなだれていた。がつくりである。

あの漁法を思い出したとはいえ、なんで洗濯ネット……いや、これはこれで今日は大活躍だったんだが……

「うう……俺の馬鹿……」

外を見れば、真っ赤に空が焼けていた。

見事なまでの夕焼けを背景に、カラスがカアカアと鳴いている。

それがまた馬鹿にされているようで、石を投げてやったが。今の境遇にはシャクに触る歌も思い出してしまったし。

「夕焼け小焼けでまたあしたー、まーたあーしーたーってか、ああ全く」

おいしい おやつに ほかほかごはんが待ってたらそりゃ帰りたいわなあ。

口に出したら何か負けるような気がして、考えるだけにとどめたとりあえず、味無しでも腹ごしらえをしよう、街に出ることにしよう。夜になればこの浮浪児姿も目立たないだろうし。

ぼりぼりと頭をかいて一つため息をつく。気を取り直して、家の外に作った即席のかまどに火を起こすことにした。

「おう、また見つけ」

今晩はそれに専念しているせいか、以前よりはるかに発見率が高い。

前傾姿勢をとり、目を爛々とさせ、小さな小さな輝きさえも見逃さない。

まさにハンターの心持ちである。

やってる事が小銭拾いでなければ、それなりにサマになっていたかもしれない。

若干人としての悲しみを感じつつも小銭の輝きは見逃さない。

しかし、この視線の低さと高スペック視力があつてのものかもしれないが、探してみると小銭ってのはかなり落ちてるものではある。絶対に人には見られたくないの、夜を待つて出陣すること3時間。総計すると1000円程も見つかってしまった。すごい。

これだけ風漬しに探すとしばらくこの一帯は小銭はないだろうけど。

拾得してばかりでは何なので、ゴミ拾いも兼ねている。美化運動である。ホームレスのおっさんの行動と変わらない気もするが、ホームレスという単語で精神的に落ち込みそうな気がしたので考えない事にする。

「ぐーむ……」

背中を伸ばす。首を回す。上半身をひねってみる。背中をまくつて翼を伸ばしてみる。どうもこういう時にコキコキ鳴ってくれないと柔軟したという気分にならないのはまだ以前の感覚を引きずっているせいかな。ともあれ、前傾でいるのもいい加減疲れたので背筋を伸ばす。

小さな住宅地によくある公園、街灯がぼんやりとベンチを照らしている。公園の据え付け時計を見ればすでに12時。よい子はとくに寝る時間だった。とても悪い子なので寝ないけど。うん、自分で悪い子とか考えて少し気持ち悪くなった。水道でうがい。水分補給、ついでに顔を洗っておく。

意識がしゃっきりしたところで、街灯の下で今晚の拾得物の確認をする。

拾うのは小銭だけではなく、何かの役に立ちそうなものは拾っている。カッターだの、ボールペンだの、安全ピンだの、空のペットボトルだの。何かに使えそうなものは片っ端といってもいいかもしれない。

ついでなので、ペットボトルをよく水洗いしてから、水を入れて持ち帰る。水場が近くにないので少々手間だが仕方ない。それに近くはないと言っても歩いて20分の距離なのだ。中国奥深くの、毎朝水くみに崖沿いで何キロも歩くような環境に比べればずっとマシというものだ。比べる対象が間違っている気もするが。

しかし、この後どうするか……

今日、どうするかではない。

少ないながらも小銭を得ることができたので、あと同じことを二、三回繰り返せば100円ショップなどを利用しながら、なんとか生きることではできそうだな。ただし、その先。

まるでビジョンが見えてこない。

いつその事、この反則的な身体能力でオリンピックでも目指すかな？ いや、翼とか生えてたら問題になりすぎるだろう。

「あるいは切っちゃうか？」

一瞬そんな気になったものの、さすがにそれは気が早すぎるように思える。というか医者行ったら絶対サンプリングとられる。こんな稀少すぎる例はないだろう。下手すれば、いつの間にか行方不明とかドラマによくある展開なんてのも……

いや、それはないと思ったものの、大小実験データの作成には「ご協力」させられそうではある。……えーと、うん。先延ばしかもしれないが、やはり人にこれを知られるのはアウトだな。

はー、とため息を一つ落とし、ねぐらに戻ることにした。

人の気配を気にしながら、夜中の散歩。妖怪にでもなった気分だ。

「お化けにや学校も、試験も何にもないってかー」

ついでに仕事もない。さらには多分戸籍もない。いずれは妖怪らしく、人の驚かせ方も勉強しておいたほうがいいのかもしいない。幸い、あの廃工場はいかにも何か出てきそうでもあるし。

そんなとめどもないことを考えつつ家路につく。

明日あたりは、必需品の仕入れと図書館でも探しておくでしょう。借りることはできないだろうけど、読むのは自由なはずだ。考えてみたら、ここが海鳴市であるという事しか知らないし。というか情報収集必要だつて、思ってたかったか俺？ 思ってたな。

「……駄目だなあ俺は」

頭をぼりぼり搔いて嘆息。そろそろ痒い。ねぐらを片付けている間、水浴びもしなかったから無理もない事だったが。風呂に入りたい。暖かい風呂に。……いずれドラム管風呂でも作ってやると胸に決意した。

「……なんだよこりゃあ」

俺は頭を抱えて呻いた。怪しまれようが構わないよう。あうあうあー。

当座の必需品の買い出しを終えて、寄ったのは図書館。とりあえず手に取ったのは新聞。

人気の少ない席に陣取り、とりあえず読み始めた時だった。のっけから衝撃がきた。

1998年5月22日（金）という日付である。

こめかみはずきずきする。確かに俺は『俺』であった時の記憶があやふやだが少なくとも21世紀には入っていたはずだ。ノストラダムスの予言騒ぎで世紀末は騒がれ、21世紀はテロが横行し、冷戦とは違った意味で物騒な時代に入っていたはず。

過去？ 時間遡航？

「ありえん……ありえん……」

何が起きてもおかしくないとは思っていたが、リアル時をかける少女になっちまうとかどんな罰ゲームなんだよ。

とはいえ、呻いていたが、逆に納得できてしまう部分もあった。それは100円ショップの品物が妙にこなれていないというか、まるで新しくできた業種のような新鮮さが店に漂っていたこととか。街行く人たちのファッションだったりとか。

道を走る車の姿だったりとか。微妙な違和感を感じ取っていたのだ。人との接触を避けていたとしても。

しかし、まあ、なんだ。

もうこの際深く考えるのはやめた方がいいのかもしれない。

時間遡航は不可能とか言われてなかったか？　とか、体が全く違うってことは脳も当然違うはずなのに、なぜ記憶を留めておけるのか？　とか。

今度こそ、今度こそ何が起きても驚かない。驚かないったら驚かないさ。

は・は・は、と妙に乾いた笑いが自分の口から漏れていた。

「はー……」

頭を抱えたままうつむいて大きなため息を一つ。

動揺が思ったより早く収まった事を少し訝しく思ったが、もう考えるのも面倒臭くなってきていた。

ぱらぱらと新聞をめくり読み始める。

おおむね、記憶と違いはない……というか、何年の何月に何が起きたとか、よっぽどの事でもない限り正確に覚えてない。競馬で一当てして大もうけとか、どこかの悪役の二番煎じも思いついたが、それこそスポーツ年鑑でもなければ、思い出せるものではない。上手くはいかないもんだ。

「むっ……」

新聞を元に戻し、気分を戻すためにトイレに。

すれ違ったおっさんがぎょっとしていた。失礼な。一応今日は人前に出るので、午前中に服も体も洗ったというのに。臭いか？　臭うのか？

自分で嗅いでみるが判らない。鏡の前に行ったところで理由に気づいたが。

「……………ああ、見た目がヤヴァいの忘れてた」

こここのところ人を避けていたというのもあるし、気にしてる余裕もなかったというのもあるが。

そういえば、結構な厨二容姿だった。

「んん？」

鏡を見ていたら、ふと違和感に気付く。

頭頂部から右斜め前にひよろつと触覚のような髪が……

「おお、これが噂に聞くアホ毛というやつか」

鏡みたいに細かく映すものでないと気付かなかった。わしわしと頭をかき混ぜてもひよろつと出てくる。しかし、これはアホい。目をきつくして睨み付けてみる。しかしアホい。俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「すごいな、アホ毛の性能。何というシリアスブレイカー。どんな情景描写でさえ、最後に『アホ毛が静かに揺れた』を加えればギャグ空間にしかないぞ」

そんな馬鹿な事をぶつぶつ呟いていたら随分と気分転換にはなった。

我ながらアホなことである。

図書館で、食用になるキノコのスケッチや、この辺一帯の地理などをメモっていたら、閉館の時間になってしまった。

途中で司書さんがこちらに気付いたらしく、何か話しかけようと

してくる。逃げ続けたが。

捕まったら、学校のフィールドワークの一環です。とても言うておこつ。欧米人に見える姿だし、勝手に深読みしてくれるだろう。きっと。

まずまず、有意義だった。

ねぐらに戻ってから整理しないといけないが、多分この答えで合ってると思う。

「この世界は『俺』から見てパラレルワールド」

海鳴市という単語に覚えがないのも当然。地図を見たら日本の形が微妙に違っていた。

都道府県の名前も一部聞き慣れないものがある。なんだよ犬上県って。

歴史もちらつと見た程度では判らないものの、何らかに違いは出ているのだろう。

何より、すんと、面白いように腑に落ちた。

ああ、そりゃ俺の家族も友達も街すらも存在しないのも説明つくわ。

「いや、しかし……波瀾万丈すぎる」

すでにお腹いっぱいです。

小説や漫画の異世界召還された連中はよくこんな状況で頑張れるな。そろそろ俺はへこたれそうだぞ？　なんかもう、リスク考えてもそこの病院に入って、記憶が変なんですーとか言って保護してもらおっか？　なんて思いついてしまふくらい。そんな愉快な事しないけどね。

「後は、なんでこんな体なのか……だが、それこそ訳判らんよなあ」

もうそういうもんだと思うしかない。

ともあれ、しばらくは細々と暮らしながら図書館通いの暮らしが続くことになりそうだ。

いずれはまともに戸籍持つて、かつてのように小さいながら飯屋でも構えて、人並みに暮らせるようになれば……いいなあ。

夕暮れに染まった道を歩きながら、ちよつとばかり黄昏れた。

## 四話

5月も末に入り、そろそろ気温も高くなりはじめ、同時に雨雲がかりやすくなった。

流石に何度も何度も落ちていた金銭を頼りにするわけにもいかなないので、最近では、海沿いの防波堤や磯で釣り客向けに飲み物や弁当、釣り餌を売っている。

朝釣りをする人は多いので、特にかきいれ時でもある。と言っても自分で弁当など作って販売するには許可もいるし何より責任もとれない。早朝からやっている弁当屋さんの弁当を買ってそれを少し高く売るというだけだ。

と言っても、釣り人そのものの数が多いわけではなく、近くに釣り具店がないのも食べていけるほど売れないからだろう。……そんなスキマ産業的な商いだが、平均して一日500円前後の収益が出るので、有り難い限りではある。もっとも、見た目でちょっと引かれて最初は買って貰えなかったが。今は名物と化している。アメリカでは子供のレモネード販売が社会勉強になっているんだよーとか言っておいたから、そんな小遣い稼ぎ兼社会勉強と思われる可能性は高いが。

実のところ他にも試したこととして、よく聞くアルミや鉄材の収集をしてみたことがある。ホームレスの人たちが空き缶を現金に換えているあれだ。幸いねぐらとなっている廃工場には分解すればいくらかでもリサイクル可能な資源がごろごろしている。

ただ、やはり買い取って貰えなかった。それどころか、親は何しでやがるんでえと怒られた。考えてみたら当然だったかもしれない。社会実習とでも言っておいた方がよかったか……。戦後すぐの時代だったら子供でも鉄くず買って貰えたのだろうけどな、残念だった。さらにもう少し暖かくなれば、砂浜でバーベキューなどする人が増えるだろうから、炭やガスボンベ、足りなくなりがちな調味料な

どの売り歩きもいいかもしれない。

売り歩きの姿を外から見たらかなりシニールだろうけどそれはもう気にしないことにした。気にしてたら生きていけない。

そんな生臭い事をつらつら考えつつコンビニに向かう。今日は弁当はもとより、釣り餌やストックしていた釣り道具も残らず売れたので、収益が大きかったのだ。たまにの贅沢として甘いものを買うというのもいいだろうと思うのだ。……いや、素直に言えば甘いものが異様に美味い。舌も子供化を起こしているのかもしれないが。きまぐれにプリンを食べた時どう表現してよいか迷ってしまうくらい美味かった。不思議なものだ。

一度、ねぐらに戻り、売り歩き用のクーラーボックス、まあ発砲スチロール箱に布を張っただけなんだが、を置いて、近場のコンビニに向かう。

店員に胡散臭げな顔をされながらも買う。ちょっとだけお高い、某なめらかプリンである。先ほどから翼がうずいて仕方がない。感情に反応するとか犬の尻尾か？ そりゃ店員に胡散臭げに見られるというものだ。

どうせなら見晴らしの良い場所で楽しもうと、地図を思い出して、ちよつとした高台の八束神社に向かう途中の事だった。

ネズミ嫌いの猫型ロボットの出てくる国民的アニメ、あれに出てきそうな空き地が通り道にある。そりゃもうザ・空き地！ ということくらいに見事な空き地なのだ。工事に入る前に企業が潰れたりでもしたのか、古い建材がちまちま積まれている。定番である土管も見事二段重ねになっている。それがどうなるかというと、近所の子供にとつて、十分すぎる遊び場になってしまうのだろう事は想像に難くない。

積みまれている建材とか、少し危ないだろうと思って、以前通った

時に見てみたのだが、誰かが既に対処したようで、崩れないように固めてあったりしてあって、無用の心配だった。誰がやったかは知らないが、親御さんの誰かかもしれない。子供の事を見ていないようでもよく見ているものだ。

ちなみに、末日である今日は日曜日で、そんな空き地で今日も元気に子供が遊んでいた。微笑ましくなるものの、遊ぶというには少し騒ぎが大きすぎないか？　と思う。

ちらつと覗き込んでみると、どうも空き地の領有権を巡っての小競り合いの最中だった。小競り合いというか喧嘩ごつこというか。一対一でお互いの陣営が人を出して喧嘩してるようだ。……ああ、そういえば今の時代ってK1全盛期だったか。ピーター・アーツ、マイク・ベルナルド、アンディ・フグ、アーネスト・ホースト、サム・グレコ。綺羅星のような華のある格闘家が集まっていた時代だ。こちらの世界でも存在するのはスポーツ新聞で確認した。

「おお、ツバサ君だ。ヘルプ頼む！」

ぼーっと思い出にふけっていたら、お声がかかってしまった。見れば、先日ちよっかいをかけてきた二人組の子供に見つかってしまったらしい。めざとい。

確か背の高くてひよろつとしたのが安田で、背は小さいが元気にちよろちよろしてるのが南部だったか。何とはなしに1600メートル走でも走らせるとよさげな二人だ。

この二人に会ったのは二日前。場所は同じくこの空き地で「おお、ド。えもんそのままだ」と土管に乗って悦に入っていた時だった。この二人はどうも同年代のリーダー的な存在のようで、自分たちの遊び場である場所に得体のしれない見た目外人の子供が居ることで警戒したのだろう。第一声は「おまえ誰だよ？」だった。多分に攻撃的なものである。

見た目の年は同じくらい。となると、小学校三年生くらいか。ランドセルを背負っているところを見ると学校の帰りに寄ったようだ。ちよいちよいと子供扱いしていると何かスイッチが入ったのか「うおーっ」とかチビの方が突進してきたので、がっぷり上手を取ってがぶり寄り、寄り倒し。いや、頭を打たないように手を挟んでる残った方が慌ててしまつて行司の真似事をしてくれなかったのが残念だった。その後も童心に帰つてしばらく遊んでいたのだ。

思えば、人恋しかったのかもしれない。名前を聞かれた時も、うやむやに誤魔化してさらつと居なくなることもできたのだが……。たとえ、思いつきの名前でも呼んでほしいと思つてしまったのは。

思いついたのは白井ツバサという名前だ。三秒で考えた。ネーミングセンスについては自分でも有り得ないレベルだと思つている。今更だ。……まあ、親が某サッカー少年の漫画が好きだったとも言えはいいか。

しかし何とも血気盛んと言おうか……この安田と南部のツートップは自分たちの遊び仲間を率いて、上級生と遊び場の権利を賭けて対決しているようだった。聞いてみると相手は二年歳上らしい。体格差もあつてなかなか勝てないようだ。聞けば、すでに10戦連敗。下級生グループは意地と負けん気でやつてるようなものらしい。……上級生はそれ遊びとしか思つてないだろ。

ともあれ、ここは混ざつて大暴れするのも大人げないので、盛大に大人げない振る舞いをするに似た。大体ヘルプを請われたからには答えねば男が廃るというものだ。身体は……いや何も思ふまい。

「先生頼みますぜっ！」

安田、お前はどこのチンピラだ。犯人はヤスとダイイングメッセージを意味もなく残すぞ。

大暴れと言っても、二人抜けばいいようだ。どうも五人制の勝ち抜きのように、今のところ二敗一勝のようだし。ルールを考えたやつは空手漫画とかの影響も受けてそうだな。先鋒次鋒とか言ってる。一人目は奥衿と袖を掴んできた。あれ？ 柔道？ おお、綺麗に大外刈りをかけられた。しかも、怪我させないようにこちらを浮かせてる。本当に五年生かこいつ。と言っても、技をかけられてる最中にそんな長考がいくらくらいに余裕でもあるんだが。

相手の軸足に、よろつと右足を絡めてやるとバランスを崩して倒れる。マウントポジションになってから頬をつまんで引き延ばす。上上下下左右左右とコマミコマンドを引っ張った頬に叩き込んでいるうちに10カウントが終了。予想外の行動にやられてる方も啞然としていたようだ。勝利。

「ういなー」

気が抜けそうな勝ちどきなのは勘弁してほしい。真面目にやってたまるか。

二人目の相手もまあ、適当に遊んで勝った。というか体格も小さいのにこの身体はスペックが高すぎる。実は吸血鬼とかいうオチだったりしないよな、と意味もなく犬歯を触ってチェックしてしまったり。

と、そんな感じで自分の身体の不思議を思っている俺を置いて、安田と南部が勝ち誇っているが、どうも雲行きはすんなりと行かないようだ。

俺が二人目に相手したのは、なかなか負けず嫌いだったようで、しかも下級生になどとは……というプライドの高い子だったらしい。こちらを助っ人を呼ばせてもらってもう一戦だ。文句言っなどか言っている。

「いや、俺はそろそろ行こ」

「乗った！ こっちにやツバサがついてるかな。簡単にや負けないぜ。今までの借りをまとめて返してやらあ」

「……うかと」

南部くんや、それは虎の威を借るようで男の子としてはどうかと思っぜ？

その台詞を聞いてニヤツとした上級生は取り巻いてる子にその助っ人さん呼びに行かせた。「クラスメイトの一大事だと言って引っ張ってこい」とか言ってるが、これってそんな一大事だったのか？ うんまあ、小学生の思考回路はさすがによくわからん。

待つてる間、暇なのでダレていたら、さすが小学三年生、安田と南部も含めて持ってきていたサッカーボールで遊びはじめてしまった。先ほどの柔道やってたばい五年生の子もそうだったが、運動神経の良いのが多いようだ。輪になってリフティングをしながらパス回しをしているようなのだが、上手い上手い。単純にサッカー勝負でもすれば上級生に勝てたんじゃないか？ と思ってしまう。

そんな様子をぼーっと見ながら、いい天気だなーと土管の上でへたれていたら、どうやらその上級生の助っ人が到着したらしい。着いて、様子を一別するなりとても帰りたいそうにしていたが。

「……で、どんな一大事だった？」

無表情だ。子供ながらにして精悍さを感じさせる顔というのは珍しいかもしれない。そんな顔でぼそっと呼び出した上級生に聞いていた。

なにやら、その上級生が拝んで頼むよーとか言っているが、まあうん、呼び出された方としてはいい気分ではないわな。「話にならない。帰る」とか言っている。

何となくその無愛想な子に軽く同情していたのだが。こちら早くプリンにありつきたいので、帰るなら帰るでよしなのだが。

「おー！ ネクラ女の兄貴なんて敵じゃねえよ！ とつとと帰れ帰れ」

空気の読めない事に定評のある南部がとても燃えやすい燃料を投下した。

先の一言と共に空気が軽く凍り付いた事にも気付いていない。パネエ。

「……そのネクラ女とは美由希の事を言ってるのか？」

「おう。あんたあの高町美由希の兄貴だろ？」

同じクラスなんだぜ！ とか言ってるが、駄目だこいつ。早く何とかしないと。空気の読み方と人様の家族を悪く言っちゃいけませんと言っておいた方がいいのか。

なんだかその無愛想な、ええと、美由希ちゃんの兄？ が、ゆらありと向き直る。

「気が変わった。受けよう」

「よ、よっしゃ、頼むぜ先生！」

安田、声が震えているぞ。そして押し出すな。

なんと言つか、うん。勝っても負けても南部には謝らせるとしよう。子供のうちだからこそ、直しておかないと……。放置しておくこれから舌禍を引き起こしそうだ。

俺が押し出されると、訝しげな顔をされた。視線は南部に注がれている。……ああ、南部が相手だと思ってたんだな。

ちよいちよいと肩を叩き、声をかけるとする。

「あー、その。気持ちは判るんだけど、相手は俺なんだ。すまない」  
「……そうか」

どうもげんなりしたようだ。

ああ、言ってみればお互い巻き込まれたもの同士だな。

「高町恭也だ。……上級生を二人とも下したと聞いている。何か武道でもやっているのかもしれないが、こちらも古武術を少々嗜む身だ。遠慮なく来るといい」

この人はこの人で本当に小学五年なのだろうか？ いや身長や体格はそれっぽいけど、口調とか言動が老けすぎだろう。嗜むとか同世代が言われても判らないんじゃないか？

というか歩いても体がまったくぶれていない。武術とか程遠い俺でも判るくらいにぶれていない。こう言うのを隙がないと言えはいのだろうか。

「一応、白井ツバサだ。よ、よろしく？」

名乗りとか知らないのでとりあえず片手をあげてよろしくしてみる。なんだかさらにやる気をそいでしまったようだが、仕方ない。

こちら、格闘技なんて学校の授業以外でやったこともないのだから、相撲や総合格闘技など見るのは好きだったが。

結果からすると負けた。かなりあっさりと。……だがなんだろうこれは。

目の前で高町恭也が頭を下げている。

「知らなかったとはいえ、すまん」

とか言ってる。微妙に顔が赤くなっているが。低学年に頭下げ羞恥心か？

いや、本当に頭下げられる覚えがないんだが。なんだろう。

んー、確か流れは……

開始から投げ技か腕を取りにくたので避けてたら、何か蹴りだの何だのと飛んできて、それでも頑張って避けてたら、ニヤアとか楽しそうに笑ってあばばば（形容不可）な事になってきたので、あれだ、足を払いにいったのだが、股ぐらを掬われてそのまま投げられた？

「ああいや、謝られる理由もないんだけど、さっきの技って掬投げ？」

「よく知ってるな、小柄な相手には有効なんだ」

ちなみに、古流の場合後ろから鞆丸を握り潰して硬直させて投げられるようにも作られている。とか聞かされた時には股間がひゅんとなった。今はないけど。

「つか、なんだ？ 高町、さんの異様な強さは。武術嗜んだってレベルじゃないだろ？」

「幼い頃からやってたからな。立てるか？」

そりゃ立てるが、いや驚いた。この世界には武術の達人の小学五年がいるらしい。一応今のスペック、蠅を箸で捕まえて宮本武蔵ごっこか出来るんだが、それでも目が追いつかないスピードって何？ いや何というか……

「世の中広いもんだな……」

独白はため息と共に吐き出された。

とりあえずは、このすげーすげーと騒ぐ南部に一言物申しておくか。謝っておくようにと。

その後は何だか、先の立ち会で毒を抜かれたらしく、上級生グループが時間を置いて場所を使うということで落ち着いた。てか、エアガンを持っていたところを見ると、ここを射撃場とするつもりだったらしい。丸く収まったところで、そろそろ行くとしよう。ちよつと関わったつもりが、一時間ほども過ぎていたようだった。…あ、プリンがぬるまってそうだ。

おざなりにじゃーなーと声をかけて、神社へ向かうことにしよう。

「……お？」

「む？」

「高町、さんもこつちに用事か？」

……言いづらいなら名前でもらっていい、と言われた。なら俺の事もツバサと呼んでおいてくれと言い、改めて名前で呼ばさせてもらう。小学生に敬語つけて呼ぶのは、こう……何ともむずむずするものがあつたのだ。見た目年上とはいえ。

その恭也だが、どうもこれから鍛錬だと言うときに呼び出されたりしく、奇しくも行き先が同じだった。八束神社である。しかし、日曜の朝方から何やってるんだ、とも言いたいような。余り覚えちゃいないが『俺』がこのくらいの時は日曜に限らず遊び回っていたような……口を出すべき筋合いでもないけど。

ぼつぼつと時折会話をしながら、のんびり歩く。

どうもこの恭也という奴は沈黙が嫌いではないタイプのようだ。無口というのともちよつと違うようだが、無愛想……というのも最初の印象だけだったな。判りにくいだけで。同道していると少しは判る。車が近づいてきたらさりげに車線に近い方に動いているし、

向かいから自転車などが来れば、自分が半歩先に進んで避けさせる。年下の引率は慣れているという風情でもある。

何にせよ、そう子供子供した精神なわけでもないようで、どんな生き方したらこうなるのかは判らないが、付き合いやすくはあった。ただ、趣味で最近盆栽に手を出していると聞いた時はリアクションに困ったが。ある程度成熟というよりこいつ中身、老成してないか？

時期が時期なので、道ばたのハマナスの紅色を愛で、アジサイもぼちぼち見頃ですなあなどと話しながら歩く。

『はまなすの丘を後にし旅つづく』の句を思い出して、旅情そられるものもあるな、などと話し合い……

いかん、つられた。老人の寄り合いのような会話になってしまった。小学生にして何という爺むささか。しかも片方は明らかに日本人離れした外見。シニールにも程がある。

「用事は終わった、恭ちゃん？ ……えあ、だ、誰？」

神社の階段を登り終えると広い境内が見え、女の子の声が降ってきた。

ああ、しょうもない用事だったよ、と言いながら女の子に近づく恭也。ああ、どうやらこの子が妹の、みゆきだっけ？ 南部が言っていたネクラ子ちゃんか。

ちよつと失礼な事を考えながら見ていると、……別にネクラという風にも思えないが、人見知りの傾向はあるようだ。恭也の後ろにそそくさと隠れてしまった。頭の後ろでまとめている三つ編みがひよこひよこ恭也の陰から出ている。何ともその小動物めいた動きにほんわかしてくる。恭也はいつもの事らしく一つ苦笑してから言った。

「先の話にも出てきたが、妹の美由希だ。そういえば……聞いてい

なかったが同年代くらいじゃないか？」

年齢10歳くらいに見えるので、あながち間違いじゃない。肯定すると、あごに指を当ててしばし考え、妹と仲良くしてやって欲しい。と言い、少し離れてアップを始めた。これはあれか、後は若いものでごゆつくり。という奴なのだろうか？

高町美由希はおろおろしている。突然の事態に混乱しているようだ。

俺は恭也の計らいに感謝をささげつつ、初々しくうろたえている美由希の膝の後ろと頭の後ろに手を伸ばし抱きかかえ。片手で挨拶をする。

「じゃあ恭也、また後日」

「人の妹をナチュラルにさらうな」

「……ちっ」

そこはまあ、冗談だったので普通におろすが。ちょっとお持ち帰りしたいと思ったのは秘密だ。

しかしなんだろうか、ロリペドからは遠く離れた趣味だったはずなのだが、子供子供した仕草がこれほど可愛く見えるとは……。いや、思えば空き地の子供の時もそうだったか。むう……保護欲求というものだろうか？

……ああ、投げっぱなしの冗談の後に放置してしまった。なんだかやるせなさそうにこちらを見ている。視線が痛かった。

とりあえず、定型通りに何のひねりもなく自己紹介と挨拶を交わした。他愛もない話を振ってみたりしているとさすがに緊張も解けてきたのか、普通に話してくれるようになったが。

そういえばいつ知り合ったのかと聞かれて、つい先程だよと言った時は信じられないようなものを見る目で見られた。さらにはこの一言である。

「…あ…あの、ぶつきらばうな人だけど悪い人じゃないから、恭ちやんをよろしくお願いしたくて。剣と家族の事ばかりで男友達は今まで誰もいなくて……ええ、と、その」

言葉が思いつかなくなったのだろう、次第にごによごと言葉が小さくなっていく。しかし、言いたい事は判った。天を仰ぎたくなつた。妹に心配されてんぞ恭也くんや。……というか判りやすいな、兄は妹を心配して妹は兄を心配してって、既にして相思相愛じゃないか。砂糖吐くぞ。

「一つだけ判つたのは、この二人どちらも友達少ないらしい。ん…」

「剣？」

さらつと流してしまつたが、古武術とか言つてなかつたつけ？  
見れば同じく「？」を顔に浮かべて首をかしげている美由希。

「別に隠すつもりでもなかつたんだが、うちの流派の中心は小太刀だからな」

アップを終えた恭也が近づいてきて解説してくれた。何でも家で伝えられている古い流派なんだとか。使う武器の事はぼかしていたものの、一種類つて事でもなさそうだ。しかし、小太刀二刀ねえ、何というか……

「忍者にしか思えん」

「俺もたまに思う」

思ってるんかい。

「ただ、国家資格を取れるほど忍者らしい訳ではないな。やはりあくまでもうちのは武術だ」

あるんかい国家資格。なんだかこちらの世界にびっくりである。実はこの世界の連中って、背中の翼程度じゃ驚きもしなかったりするんじゃないだろうな。必死こいて隠してるのが馬鹿馬鹿しくなってくるぞそれは。

……と、大分話し込んでしまっていたな。美由希ちゃんも兄を待ってるようだし頃合いだろう。

「長々と話しちゃったな、鍛錬があるんだろ？ そろそろ邪魔にならないところでも行っとくよ」

「む、そうか。ところでツバサは神社に用事でもあったのか？」

「おお！ プリンを見晴らしの良い所で食べようと思ってね」

何とも言えない微妙な表情を浮かべた二人を残し、景觀の良い場所を求めて散策を始めるのだった。

## 五話

「う……ぬるまったい……が、美味しい」

さすがのこだわりプリン。冷たさが無くなっても濃厚な卵とクリームのコク、ほどけるような舌触りは健在だ。

八束神社の境内はそれ自体が一つの小山の上に設けられている。本殿の造りの割に土地はかなり広く、それは先程まで話していた高町兄妹が鍛錬をできるだけのスペースがあるという事からも判る。

その境内の端、ちよつとした崖になっていて、落下防止の柵があり、そこからは海鳴市と海岸線が一望できる。30年は経っているだろうなかなかの大きさの楓がその風景に彩りを添え、秋頃、紅葉でも始まればさぞかし映えることだろう。

そんな絶景を眺めながらの甘味はなかなかもって良いものである。この子供舌になって一番嬉しい部分かもしれない。

ゆっくり味わいながら食べ終わり、余韻を楽しむ。遠く聞こえるホトトギスの鳴き声が一層風情豊かなものにしてくれるようだ。

「うし、充電完了」

身体はあまり疲れを感じないが、精神的な疲れは別なのだ。メリハリをつけて休まないと保たない。

今日は朝方から人と接する機会が多く、それなりにストレスになっていたようだ。

「しばらく人と没交渉だったからな」

独り言をつぶやきながら神社の入り口の方にゆっくりと歩く。日を見るにまだ正午には達していないようだ、10時から11

時といったところだろうか。正午を回ったところでサンドイツ屋でパンの耳でも仕入れようと思っていたのだが、まだ、少々時間があるようだった。

「おー、やってるやってる」

境内の本殿よりちょっと離れた場所。木々に囲まれた少し平地になっている場所で、高町兄妹は鍛錬を行っているようだった。

少し茶目っ気を刺激され、気配を消して、息を殺しながら近づいてみる。

ちなみに、この技術にはかなり自信がある。アホ親父に幼少期よりサバゲーに連れ出され、いかに大人に見つからないようにするかを突き詰めた結果、かくれんぼの達人と化してしまっていたのだ。

それに今の身体のスベックが加わると、誇張表現なしでとんでもないことになる。と言ってもこのように障害物がある場所限定だが……何分、この真っ白い肌と髪と目は目立ち過ぎる。

と、それなりに近づくことに成功してしまった。二人はまだ気付いていないようで、今は型稽古をしているようだった。小太刀二刀と言っていたように二尺あまりの木刀を使って、ゆるゆると型をなぞり、攻めたかと思えば守り、隙を作り、誘い込み、一刺しを与える。

ゆっくりした動きとは裏腹に二人の顔は真剣そのもので、見ているだけでこちらも緊張してしまいそうだった。

その一巡の動作が終わると、また同じ構えに戻り——速っ！

同じ動作の攻めから守り、隙を作ってから誘い込み、そこからのカウンターまでの一連の動作を先程のゆっくりとした動きから一転していきなり凄まじい早さで繰り返す。

出すほうも出すほうだが、受けるほうも受けるほうか。

若干小学三年生の子供がそれを型通りに捌いてみせるとは誰も思わないだろう。大体、あんだけゆっくりした動きに慣らされれば、

急激な速度の変化に動体視力が追いつかない。というか脳が追いつかない。なんというかとんでも剣術だなこりゃ……

「ん、これで今日の分は終わりだ。上達したな美由希」

「ふへえー」

どうも終わりらしい、何やら恭也はトレーニング帳？ を取り出してメモをしている。美由希はへたりこんで肩で息をしているようだ。

「お疲れさま、随分ハードな鍛錬だな」

「うんー、でも伸びてるっていう、実感があるからねー……………つてええええ！ いつからそこにっ」

木に引っかけてあったタオルを美由希に渡してやると盛大に驚かれた。ああ、こらこら、驚くのはいいが鼻水が出てる。タオルの端で拭いてやる。

「いや、ゆらゆらと型稽古してるあたりから？」

「気付かなかった……」

そりゃ、野生の鳥にも気付かせないから。

さらに、こここのところ隠し事が多いのでこそそしていたらさらにかくれんぼスキルが上がった気がする。今ならスネークになれる。

「でもすごい隠れ身だね。恭ちゃんは気付いた？」

「む、いや……」

何やら恭也は思案気にしている。考え込むとこいつ全く感情が読めなくなるんだな。仏頂面もいいところだ。

考えがまとまったようで、こちらを真っ直ぐに見て言った。

「少し立ち会ってくれないか？」

「あー、いい……よ？」

あれ、適当に返事してしまったが。  
立ち会い？

何というかどうしてこうなった。

あの後、木刀を一振り渡され、お互い一刀の状態で打ち合ってみるとか。

何考えているのか判らん。打ち合い稽古は竹刀じゃなかったか？  
とりあえず、やるだけやってみるか、見よう見真似で振り回してみる。全く当たらん。当然か。あのとんでも剣術を納めている以上、素人の振った剣など丸見えだろうな。

ただ、恭也の方で相当加減しているのか、こちらも一応は全て避けることが出来ているんだが。

「ッ！」

10合も打ち合ったり、かわしたりしたところだったか。

何を思ったか、俺が思い切り振った袈裟懸けの下で下から打ち合おうとしていた木刀を落とした、って危なッ！

体重を乗せた一撃を振り下ろしているのを、無理矢理腕の力で止める。痛てててててて！ 攣る！

「うおお、あーぶなかったあ……」

恭也の頭上10センチ位のところで木刀は止まっていた。冷や汗がどつと出る。

腕攣ったが。

しかしこいつぁ……

「何やってんだよ……幾ら何でも危なすぎだろ？」

俺の馬鹿力で振られた木刀だ。幾ら素人の大振りといっても、当たったら洒落にならない。

非難した目で見てみると、目を落として幾分かすまなさそうな声で言った。

「……まず、済まなかった。試すような真似をしてしまった事を詫びる」

「はえ？ 試す？」

アホ声が出ちまったじゃないか。アホ毛に続いて「はえ」とか「ほえ」とか言いだしたらとてつもなく末期だと思うので、そういう妙な事を唐突に言わないで欲しいものだった。

んー、しかしまあ、なんか真面目な目えしてるし。とりあえずは。

「聞こうか」

「ああ、全てを話す訳にはいかないが」

わざわざ、そんな言う必要もない前置きを入れる恭也にがつくりと肩を落とす。真面目なのはいいんだが、融通効かないんだな。

まあ、なんだ。一通り聞いたところによると、要するに、割と二人の流派は敵が多いのでそれなりに日常も警戒している所に、何故か妙な運動能力もった外国の子供が絡んできたので、敵味方定かならず、剣で試してみよう。というトンデモ理論だったらしい。最後

の恭也が木刀を落とした瞬間に少し殺気でも混じれば、敵だと判ったそうだ。殺気感じ取れるとか……いや、そうだな、まだこいつも老成してるものの小学五年生だった。そりゃ殺気くらい感じるよな。

「あー、なんだ。とりあえず第三の目とかは開眼しないようにな？」  
「？」

「いや、判らなければいいんだ……ともあれ、理由があんなら気にするなよ。俺は気にしない」

と言つても、真面目で堅物なこやつはどうも申し訳ないと思つているようなので……

『じゃあさ、友達にでもなつてくれよ。それでチャラな』……嘘だ。そんな甘酸っぱい少年漫画的のエコーがかかるような台詞を吐くはずもなく。案外面白かったから、剣の基本でも教える。とでもこねて納得させる。高町家のトンデモ剣術じゃない方だな、とは言つておいたが。……いや、流石にさっきの立ち会いで文字通り子供扱いされたのがなんともかんと。うん、くやしいのかもしれない。別にどんな奴にも勝ちたいという程、勝負事に執着はないが、あそこまで軽く扱われると、時にはそういう気分にもなる。というか、先程の無防備に見えた状態でもあいつ悠々と避けられたらしい。腕攀らせて止めた俺は涙目である。

そんなごたごたしてるうちに正午のサイレンが海鳴市に響き渡った。焼きたてパンの耳を狙っている身としてはそろそろ行かなくてはならない。

名残惜しげに「ツバサくんまた明日くる？」とか聞いてくる美由希ちゃんに癒された。普段は早朝にやっている鍛錬らしいので、それに合わせて来ることにして別れる。

天気は残念ながらそろそろ雨が落ちそう、ただ心はほっこりしていた。

昼食は香ばしい焼きたてパン耳を山で採れたキノコのスープと共に頂く。ハーブ類もかなり入っている。最近では種がどこからか運ばれたものか、野にも自生しているものが多いので助かった。

ぼつぽつと屋根から音が聞こえてきた。

どうやら雨らしい。やれやれと腰を上げると、外に干してあった魚を回収して屋内に入れる。若干生臭くなるが、こればかりは仕方ない。

それなりに本降りになりそうなので、今日は山に出るのは諦める。低い山だからといって雨で視界の悪い中、山歩きなど好んでするものではない。

そうなると、唐突に暇になってしまった。

食料のストックはまだあるし、必死こいて修繕したおかげで、生活環境もそれなりに整っている。

ぼーっと音のするトタン屋根を見上げているのも飽きたので、雨がやむまで燻製でも作ることにする。

やり方は簡易に作るなら至極単純だ。ある程度の熱に耐えられる密閉容器があればその中で魚なり肉なりを燻せばいい。乱暴な言い方ではあるものの、そういうものだから仕方ない。

ということを使うのはどこにでも手に入る段ボールである。幸いダルマストーブという便利なものがあるので、排煙管を途中で外して穴を開けたダンボールに直結すれば簡易スモーカーの完成だ。間にブロックを挟んで熱で燃えないようにはしてある。温度管理はさすがに適當になるが、ひとまず、先程回収した干しておいた川魚をダンボール内に吊り下げる。

スモークウッドを買っていたわけでもなかったので、薪として集めておいた木の中からナラっぱい木を選んで火を入れる。煙が目的なので、最初に熾火を作ってから少量ずつ足すのみに留める。

もちろん、作業は全て小屋の外。小屋の屋根を延長した形でトン屋根をつぎはぎ延長して、柱で補強。少し盛り土をして簡単な屋根付きテラスのようにしてある。本格的な梅雨前にやっておいて良かった。屋内でダルマストーブを調理用で使うこともできるが、これからの時期は暑くてかなわないし、一応土間に竈でも作る気になればできるが、換気扇などついていないのだ。あるいは天窓でも設けない限り煙たくて困る。

煙で燻している間に、ついでの仕込みということで、血抜きをしておいたキジバト——よく朝方にホーホーポッポーとリズムカルに鳴く鳥だ。見つけたので石を投げたら見事に落ちた。その下ごしらえでもしておく。羽根をむしってからストーブとは別に設置してある竈の火で炙り、残った毛を焼く。ワタを抜いてから水で洗う。手羽と足、胸とモモあたりに手早く解体して塩水に漬けて臭み抜き。ガラはこのまま鍋にかけてスープを取ることにする。

香味として公園に生えていた月桂樹の葉を数枚、ネギの代わりのノビル、山椒の葉を投入して竈にかけておく。

切り取った手羽先は塩胡椒を振り、切れ目をいれてセリの葉をダイレクトに突っ込んで、尖らせた木の枝に刺して竈の火の近くに立てて置く。まあ、ただのおやつ代わりの焼き鳥だ。

こうして料理をしていると以前の仕事を思い出してやはり楽しくなってきたしまう。料理というものを余り上品なものにしたいなくて、店ができた時もわざと飯屋■■なんてつけて、メニューも和洋中なんでもござれなんてのにするから、出だしは大変なもんだった。伝票管理なんぞも考えないで見切り発車なんてするから■■には大分迷惑を……

「いつつ……」

こめかみを揉む。記憶のあいまいな部分を頑張っと思ってそうとすると、脳味噌が反乱を起こすかのように頭痛が起こるようだ。…

…むっ、脳に痛覚って無いんじゃないか？  
さすがにもう泣き喚きなどはしないが、やはり少々落ち込むものはある。

「せっかくの良い気分には差しちまったなあ」

背中の翼も心もち垂れてしまったようだ。ちなみに今は隠す必要もないので、背中に穴を開けたＴシャツなどを着たりしている。…ふと思っただが、今の姿で鳥の手羽に齧り付くとか、かなりシユールなのかもしれない。共食い？ 気にすることなく食うが。

考え事をしてる間に、ほどよく焼けた手羽の肉厚の部分に噛みつく。外はカリカリ、中からセリの香りと混じった濃厚な野鳥の肉汁が溢れる。やはり焼き鳥はブロイラーより野鳥の方が味が濃くて美味い。何とも至福である。といっても一串なのであつという間に食べきってしまったのだが。

そんな事をしているうちに辺りも暗くなってきた。鳥人間（笑）にも関わらず夜目が利くので、月明かりでもあれば夜もあまり不自由はしなかったのだが、さすがにこれだけ雲がかかってしまうと夜になれば、まるで見えなくなってしまう。蠟燭に火を灯す。ただ、そう無限にあるものでもないの、やはり今日は早く寝ることにしよう。江戸時代のような、日が昇れば起き、日が暮れば寝る生活なんてものを自分がやるとは思わなかったが……妙なおかしみを感じながらぼんやりと雨音を聞き、夜は更けていった。

「基本は両手共に小指で握り、他の指で支えることだ」

とのことらしい。何かと言えば刀の握り方とのことだ。言われた通りに握っているのだが、もっと柔らかく握れとのことである。添

え手は鶏の卵を握るつもりでとか、すっぱ抜けない？

足運びも含め、何度かやり直しを食らいながら、形になってきたら、とりあえずはそれで素振りを倒れて立ち上がれなく程度にやれとのこと。

スパルタじゃね？ とこぼしたところ、恭也と美由希に「何いつてんだこいつ」的な不思議な顔をされた。そのくらいは当たり前らしい。恐ろしや。

「ごちゃごちゃと何をやっているか」というと、先日ちょっと口に出した、剣の基礎を教えてくれという約束の事だ。こいつはあれか、俺様が教える以上は生半可で済ませるつもりはないとかそういう奴なのだろうか？

これを使えとか言って渡されたのは鉄芯入りの木刀。出所を聞くとか口を濁していたがどこから持ってきたのか……小太刀二刀の練習では使わないであろう長さ、そしてずっしりと重みがある。

「それをまともに振るえるようになれば三尺の野太刀が振るえるようになる」

こいつは俺を侍にでも仕上げるつもりなのだろうか？ 並の同年代の子供の力だと10回も素振りすれば腕上がないんじゃないだろうか。

ただ、このチョイスも理由があつてのことだったらしく、俺の一番相性が良さそうな剣を考えたらそうなったということらしい。

単純に力と速さがある分、小手先の技に頼らないで『一の太刀を疑わず』の示現流のような方針で鍛えるのが良いそうだ。かけ声はちえりおーとでも言えればいいのか？

……いや文句を言う気はないし、そこまで考えてくれたのは有り難いが、剣の基本という話はどこに飛んでいった……？

「考えてみれば俺も美由希も他流を使える練習相手は居なかったか

らな。楽しみなことだ」

物騒な事が口から漏れてますよ……聞こえなかった事にしよう。なんだこのドラゴン。ールの住人のような小学五年生は。なんだ、今更だが、割と関わってしまうといけないような人物だったのか？

「……ええ、と。ね、いつしよに頑張ろう？」

多少申し訳なさそうに、でも同年代の仲間が出来たのがそれなりに嬉しいのか、ゆるっとした笑顔を覗かせた美由希の顔はかなりの癒しになったのだった。衝動的にお持ち帰りしそうになり、恭也に物理的な突っ込みをかまされたのは言うまでもない。

## 六話

早朝は神社で剣を振り、昼は山海でのハンター生活。空いた時間は売り子でお金を稼ぎ、夜は夜で、恭也をフルボッコにしてやんと胸に秘め、やっぱり剣を振る。

そんな生活もいつの間にか二ヶ月が過ぎた。

いやはや、目的を持って何かやっていると感じると時間の流れがとても早く感じる。

さすがに二ヶ月も続けているといろいろ判ってくるもので、まず。

「ツバサ、お前は剣技を使うことはできない」

と言うことだった。唐突にこの台詞を言われた時は頭が疑問符ばかりになったものだ。

まるで判らるので説明を求めると、少し難しい顔をしながら話を始めた。

「大なり小なり技とは、弱いものが強い者に立ち向かうための術だから、どんな技でも……俺や美由希の使う御神の技でさえ、ほとんどは弱者が使えるように作られている」

そこで一息切ると、言葉を選ぶかのように考えながら続ける。

「ツバサの運動能力、反射神経、単純な膂力。全て人を大きく超えるものだ。だから、お前には使える技という技が無い。もし技を使うとしたら……お前自身が作るしかないだろう」

確かに細かい事を考えるより、ただ速く斬りつけた方が性にもあっているが……そこまで化け物じみていただろうか？

というか、さらつと人のこと人外扱いしているな。

「……自覚がないようだな。お前が本気で木刀を振って頭に当たれば、頭蓋骨折で済まずに吹き飛ぶぞ？」

顔色を読んだのか、そんな怖い事を言い始める。いやいやまさか。美由希の方を見ると、こくこくと頷いている。

がつくりうなだれる。危ないとは思ってたものの、そこまで危険物になっていたとは。

「ツバサくんは……大雑把だから」

「美由希ちゃんや……それフォロ―違う」

しかし、そんな危ない剣の割に何度も何度も受け止めてられていたが……。

ふっと思つたので聞いてみると、殺気のこもっていない武器は捌くのに苦労しない、だとか。

「私は、割と加減されてるから避けやすいかな？」

と、これは美由希の言。いや、防具も着けてない女の子に本気で木刀で殴りかかるとか気分的に無理だから。

恭也なら良いのかというの良いのだ。こいつは、にやーとか怖い笑い浮かべながら捌きに捌いてしまうのだから。むしろ、もっと回転を上げる！ とか注文が飛んできたりもする。

「しかし、そりゃ俺って相当怪しかったんじゃない？」

ふっと思つてそう言つと、二人ともコケていた。背後にズコーと擬音が幻視できてしまいそうだ。さすが御神の剣士、見事なコケか

たである。

「今更、それを言うか……」

「あ、はは……ツバサくんは……大物だね」

そんなことがあったり。

また、本格的な夏に入り、ミンミンゼミが喧しく鳴き立てる頃、恭也がしばらく来れなくなるので美由希を頼むと言われた事があった。

聞いてみると何とも呆れるような理由で、夏休みを利用して武者修行に行くてくるらしい。まあ、それはこの剣術馬鹿のことだから理解はできる。

しかし、頼まれるのはやぶさかではないが、なんで俺？ 確か父親が剣術教えてたりしてるんじゃないかなかったか？

その問いに、恭也は驚くほど複雑な表情を浮かべた。

「その……だな。実家が……ピンク空間なんだ」

小学生とは思えない疲れたため息と共に言う。

「なのは……うちの末の娘が可愛い盛りの二歳でな。うん、それはいい……それはいいんだが、なのはを挟んでの二人が……甘くて……甘過ぎて……」

いつまで新婚気分で居るつもりなんだ、と呟きながら声にならない呻きを漏らす。

やっとわかった。父親から剣術を教えてもらっていると言う割に外で鍛えてばかりだった理由が。

砂糖の海に飲まれて溺死しそうだったんだな。

俺は同情の念をこらえきれず肩を抱いた。

「よくやった……今までよくやった。お前は暫く武術の世界に浸りきって、自分を取り戻してこい、な。美由希ちゃんの事はしばらく任せられたよ」

「……すまん、頼む」

そんな三文芝居みたいなことをやってみたり。

そして、夏休みと言えば、風物詩というものがある。

小学生なら割と高確率で苦しむことになる夏休みの宿題である。

「というわけで、自由研究が進まないの。……助けて？」

「……その無理してる上目遣いをやめたら助けるよ」

やった、と小さくガッツポーズする美由希。上目使いでお願いとか誰に教わったと聞いたらカーさんと来たもんだ。

高町家の母親は茶目っ気成分が多めらしい。

しかし自由研究か……昔を思い出してみるも、記憶が曖昧以前にもう覚えてない。……そりゃ小学生の時の頃ってあんま覚えてないよな。

んー、とカップ麺が出来上がる時間ほど頭を悩ませ、とりあえず選択肢を出してみる。

「実験、社会見学、図画工作、自然観察、どれがいい？」

「ツバサくんの好きなので！」

がつくりと力が抜ける。昼食に入る店を探してるわけじゃないぞ。美由希はこういう天然な所がたまにあるので時に困る。普段は同年の子供からしたら大人っぽい部分も見えるのだが。

恭也もこれは毎年手伝わされているのだろうか？ いや、奴のとだから、説教臭い事を言ってから参考になりそうな本でもさりげなく置いておきそうだな。

と言っても恭也の真似は難しいし、結局あーだこーだと言い交わしたあげく、自然観察。貝殻の調査というとても無難なところに落ち着いてしまった。

「やってきました臨海公園」

ここ海鳴の観光名所の一つでもある。

広い敷地が魅力の場所で、砂浜には夕方になるとバーベキューをする家族や若者がかなり居る。日々の稼ぎどころの一つだった。

海水浴客で賑わっているが、今回はそちには向かわないで、海水浴禁止の区域。そちらは砂浜があるとはいえ、遠浅ではなくすぐに深い棚があるようで、遊泳は禁止されているのだった。

やることは単純で、海辺に落ちている貝殻を拾って図鑑で確認、標本として回収し、貝の名前と大まかにどこで拾ったかをメモに書き込んでいく。これなら一日で終わるし、ありきたりながら悪い評価は貰わないだろう。手分けして貝を拾い出すのだった。

……おおむね一時間も拾い集めた頃だろうか。それなりに色々な種類の貝殻を集めることができ。一端合流することにした。

美由希が貝を集めている地点に着くと、一心不乱に図鑑を読む姿があった。

間近に立ってみる、気付かない。一拍考えたのち、後ろに立っておもむろに自分の背中に手を回し、たたんでいる翼から羽根を一枚抜き、無防備な首筋にセット。3、2、1、ごー。

「……！！ ひっひひゃふひふはひゃあーっ!？」

なでりつとした瞬間、飛び上がりそうになるけど動けない！ と

言った感じにびくんと背が伸びる。翻した手でもうひとなですれば、ぶるぶると震えながら意味不明の声が漏れた。

あまりの反応の良さにちょっとうっとりとしてしまいそうに……  
いかにいかに。

「癖になつてしまいそ……いや、美由希ちゃんの方は調子どうだ？」  
「……何か聞こえたくもないような言葉が聞こえた気がする」

気のせいだと言つて、じと目で見つめる美由希をよそに開かれた図鑑を覗き込む。子供向けの貝類図鑑の巻き貝のページが開かれていた。

「あ、ねえねえ、この貝なんだと思う？ 図鑑に出てなかったの」

と、美由希が図鑑をどかすとその下敷きになっていたのは直径20センチはあろうかという巨大な巻き貝の殻だった。というかこれはアレだ。生きた化石。

「オウムガイじゃん……」  
「えええっ！」

どうやら美由希も知っていたようだ。貝殻だけだと想像つかなかったか……確か、イカとかタコに近いんじゃないかな。そりゃ、図鑑によっちゃ載ってないよな。

たまに砂浜に漂着することはあるらしいが、まさか見つけてしまうとは、どんだけ運がいいというか何というか。

ひとまず、俺が回収してきた分でそれなりの数は揃ったし、オウムガイという目玉もある。自由研究としては十分だろうと言うことで、帰る事にした。帰り道に今時珍しい屋台のタイヤキ屋を発見すると美由希は目を輝かせ。

「あ、あれ、恭ちゃんが絶品って言ってたタイヤキ屋さんだ」

と、走り出した。いつもは控えめだが、こういうところもあるらしい。

早く早くと言うもので、急ぎ足で追いつく。

「今日は手伝ってもらっちゃったし、私がおごるね」

なんて言うので有り難く奢られる。しかし……店を覗き込むと種類豊富なこと、チーズ、カレー、ピザ、ジャーマンポテト、泰山麻婆、メシアンカレー……後半何か危険な香りがしないでもない。

頼んだが最後、後戻りできなくなるような……ゲームブックで言うならいきなり『あなたは壁に潰された』というページに飛ばされそうな選択肢、そんな気がしてならない。

「……いやいや、妄想だ……」

頭を振っていると、美由希が首をかしげて待っているので、手っ取り早くチーズ味を頼む。

美由希はつぶあんを頼んだ。家が洋菓子を扱う喫茶なのでこういう時はあんこの入ってるものを選ぶのがお決まりらしい。

ベンチに座ってもくもくと食べる。

しばし、まったりした時間を過ごして解散した。こんな何もない穏やかな日々というものも良いかもしれない。普段が普段、山で獣を追いかけたり、恭也を仕留めに行ったり、生活費のために愛想を売ったりしているので特にそう思うのかもしれないが。

暦は8月に入り、いよいよもって暑くなってきた。

実のところ涼しい格好がしたい。タンクトップ一枚と短パンでうろつきたい。

ただ、日差しが厳しいのだ。紫外線が激しく責め立てる。メラニン色素が極端に少ないだろうこの身体にとつて、夏でも長袖は必須だった。何せ日焼け止めも無しにあまり太陽の直射を受けると水ぶくれすら出来てくる。本当に困ったもののなだ。そんな今の格好はぶかぶかの長袖シャツに、バザーで安く手に入れたジーンズ、髪は一回切ったのだがまた伸びてきて鬱陶しいのでスポーツキャップの中でまとめてしまっている。真夏でさえなければそれほど怪しまれるほどの格好でもなくなってきたいるはずだ。

そんな季節外れの格好をしたまま、クーラーのよく効いたデパートに入り、迷わずもう常連と化している書店コーナーへ。大窓の外には溶けるような日差しの中せわしなく人が行き交う。だが、この一枚の窓の内側は天国だ。立ち読みも可で、最近ではもっぱら日中の最も暑い時間帯はここで過ごしている。

「おう、これは……」

一冊の本を見つける。シュールな猫漫画。ねこ。るだった。ちなみにこの世界ではまだ作者も元気に活動しているようだった。

ぱらぱらと読みふけり、記憶より鮮烈なシュールさを感じてその鬼才に震撼した。

そんな猫漫画を読んでいたのが悪かったのか、視界の端、窓の外にふっと猫耳が映った。低い位置ではない。普通の人の頭のある位置に、だ。

「むう？」

瞬きを二度三度、やはり歩いている。

猫耳、猫尻尾つけた女の子が二人、初老の男性の後ろを従者よろしく歩いている。どんなプレイだ？

あり？　あまり変に思わなかったが、よく見ると服とか相当アレじゃないか？　モノトーン調のワンピースで、何というかボディコン？　上は肩パッド入ってて、スーツっぽくもあるのだが。

控えめに見ても何かのコスプレにしか見えないのだが、何だろうかアレ。目を離すと別に違和感ないというか。その違和感の無さにかえってモヤモヤするものを覚えるのだが。

「ぬーむ……」

悩んだ時間はわずかだった。

見失ってしまうかもしれないし、どうも気になって仕方ない。後をつけてみる事にした。

幸い、気配を殺して隠れる事については、恭也のお墨付きさえ貰っている。このまま前に行く猫娘ズとおじさん、三人でその手のホテルにでも入るなら……まあ、そういう業種のサービスだったのだろうし。とりあえずあの感じた違和感が気のせいなのか確認したい。つけて見ると違和感はおさら大きくなってきた。ちょっとだけ、迂闊だったかと思ってしまう。

何しろ周囲の人間がまるで不思議に思っていない。

猫耳とか露出の高い服とか、あるいは前を行くザ・紳士と言った風体のステッキ持った初老の男性とか。目立つ部分はかなりあるのだが、誰もそれが異様だとは感じていないようだった。

暑い盛りというのに、冷や汗が流れる。

真っ直ぐ歩いているだけなのに、人通りが見る見る減ってきた。

ふっ、と三人は左に折れ、路地に入っていく。なんだか判らないが、いや判らないから怖いのか。……もう興味本位の追跡はここで終わりにしようと思い、左は見ないように真っ直ぐ歩いて、通り過ぎようとした。……したのだが。その瞬間身動きがとれなくなった。

「……なっ……く……!」

声が出たと思ったら次の瞬間には喉に何かが巻き付き、声が出なくなる。

周囲を見ても誰もこれが異常だとは気付いていない。何が起きている……？

「ありゃ、可愛いストーカーさんだねえ」

「ロツテ、眠らせる程度でね」

りょーかい、という妙に間延びした声と共に視界が暗くなり、急速に意識は遠のいていった。

## 七話

時空管理局なんてものがあるらしい。

大仰な名前である。いや、実際やってることも大仰っぽいのだが。実際のところどういう組織なのかは実感をもって判ったと言うわけではない。

ただ、今は確認のしようもないので、鵜呑みにするしかないと言うのが現状だ。

どんな現状かという話は一時間ほど前に遡る。

目が覚めたら隣に住んでいる奥さんがベッドで寝ていた。昨晩はいささか、酒の度が過ぎたようだ。

……なんて、アダルトな展開はなく、清潔そうな、一見して普通のホテルの一室だった。飾り気のない部屋にはベッド三台と簡易化粧台が配置されている。その端のベッドに寝かせられていた。

身を起こして、あくびを一つ。しかしまた、なんでこんな場所で目を覚ますことに……

ああ、思い出した……

妙な違和感。ぶんぶんの三人連れを追いかけたら、捕まえられたんだなこりゃ。自分を過信していたかもしれない。好奇心鳥を殺すとか、洒落にもならない。

ただ、捕まえられたと言うには警戒がザルというか、普通にベッドに寝かされてたんだが、これは危害を加える気はないよーって事なんだろう？ それとも自信？ あるいは両方か。前触れもなく急に身動きも発声も抑えられる事を思い出すと、下手な動きはしないほうがいいか。

「あ、起きた？ …… 動転してるかもしれないけど、少し待ってね、紅茶でも入れてくるから」

急にドアが開いて、ビクツとする。すぐに紅茶を入れてくるとかいつて引ッ込んだが、先程街で見た女性の片方だった。淡いブラウンの長髪を揺らしていたが、その頭にあっただのはやはり猫耳だった。とりあえず、急に何をされるというわけでもないようだ。素直に待つ。というかそれしかできないんだが。

しばらく待っていると、初老の男性と共にティーセットを持った女性が入ってきた。

男性が慣れた手つきで紅茶を入れ、サイドテーブルに置いてくれる。自分のカップにも注ぐと、一口味わい、目を細め一つ頷くとコトリとソーサーにカップを戻す。

妙に美味そうに飲みやがる……！

そろそろと手を伸ばして出された紅茶を頂く。ふんわりと甘い香りが鼻孔をくすぐる。口に入ればなかなかの渋みを感じさせるが、不快な渋みではなく、苦さとは別のもの。コクと言ってもいいかもしれない。紅茶は詳しくないが、何とも美味しい。やるなこの男。

「おかわりはいるかね？」

気がつけばカップが空だった。

してやったりという笑顔がシャクだが、斜めを睨みつつ、そつとカップを出す。

うう、美味い。

妙にまったりしてしまった。

「……何、そう構えられても困るのでね、そうだな……」

目の前の初老の男性は少し考える仕草をした後、一拍を置いて言

った。

「目の前の人物がいったい誰なのか、今の君の状況、君を取りまくこの世界が何なのか。一つ一つ話していきたいのだが、構わないかね？」

「……いや、今の状況から話してほしいとこなんだけど」

それを説明するためにも必要なことでね、と前置きし、少し悪戯っぽい顔になるとこんな事を言った。

「実はね、私は魔法使いなのだよ」

これは……すごいな爺さんと返すべきなのか……？ さすがに偶然だろうけど、こんな台詞を生で聞けるとは思わなかった。

恐らくこの世界の誰にも判らないだろうネタで勝手に俺が戦慄している、妙な表情にでもなっていたのか。

「うん？ 信じにくいかな、ではこれでどうだろうか？」

指をぱちんと鳴らすとその指の上に魔方陣のような模様が空中に現れ、子供向けの人形劇が立体映像として動き始める。

これは……驚いた。

「幻術魔法のアレンジだが、なかなか面白いだろう？」

「……む」

またしてもしてやったりという笑顔をしてやがるので、何とも言えない気分になる。そう言えば先程の映像といい……ああ、忘れてた。子供にしか見られてないよな。あれか、このしてやったりという笑顔は微笑ましく思われてるとか、そんなたぐいの笑みなのか……

少しやさぐれそうになる。  
ともあれ、そう！

「今の俺はどういう扱いなんだ？」

言葉を飾っても仕方ないので単刀直入に聞いてみる。

「ふむ……女の子が『俺』などと言うものではないよ？」

「は？ え、いや……」

少し混乱した。女とか、いや確かに身体はそうだが。ってそうじゃない、見た目ではそんなのは判らないはずだ。きっと。少なくとも今朝、鏡で見た分には。

……ああ、そうだ。なんで気付かなかった。ストーキングしていた見た目からして不審な人物を確保すれば、ボディチェックくらいはするわけで、身体の事も……翼生えてる事とかもあれば？

俺、オワタ？

「そう慌てないでも、大丈夫よ？ 脱がしたのは私だから。背中のは……私はちよつと……本能刺激されちゃったけど」

男性の一步後ろでにこにこ控えていた女性がニヤーと笑った。鋭い犬歯が見える。よく見れば瞳孔が鋭くなってる。こっちはこっちで別ベクトルでまずい。食われる予感が消えない。猫と鳥なんて相性が悪すぎる。いや自分でも何考えてるんだか、誤魔化せるのか？ というかこの反応割と普通なのか？ 訳わからん。

「なに、慌てないでほら、砂糖でも入れて飲むと良い。落ち着くと思うよ」

そう言って砂糖を一杯、二杯と入れ差し出してくれる。

落ち着けというのは確かなので、うん。頂く。脳裏には「まだ、あわてるような時間じゃない」と仰るツンツン頭のバスケマンが……馬鹿な事を考えて、紅茶の甘さを感じるうちに頭が冷えたようだ。どのみち、何を知られようと今この状態はひたすらまな板の鯉なんだから、こちらはひたすら情報を聞き逃さないようにするしかない。

ただ、この態度からすると随分友好的なようだが……いや、話しかけも無しにいきなり拘束されたわけだし、楽観は禁止か。

「ふむ、そうだね……落ち着いたところで名前でも聞かせて貰えるかな？ 私はギル・グレアムという。君は知らないかもしれないが、イギリスという国の出身でね、先程見せたように少々魔法使いもやっているのだよ」

「……白井ツバサ、です」

と言うと少し目を見開かれた。適当につけた名前だってバレたか？ 日本語判ってるみたいだし、そりゃばれるか。幸いそこはスルーしてくれるようで「じゃあ、今の君の状況だ」と、組んだ足の上に軽く手を乗せ言った。いちいちサマになる爺さんである。

「次元漂流者という言葉があるのだが……」

そこからは、様々なことを一気に説明されたので整理するので正直一杯一杯だった。

判らないものを聞き返せば、どういうものかを的確に説明してくれたし案外この爺さんは教師などに向いているのかもしれない。

どうも、世界というのはやたらめったら多いらしく、そのの行き

来の技術を持っていて警察のようなことをしているのが、その時空管理局という組織らしい。

このグレアムという爺さんもその所属の魔法使いらしく、魔導師と呼ぶそう。スゴ腕らしい。後ろで猫娘がお父様は管理局でも有数のトップ魔導師なんですよとか自慢げにしていた。

ふと、そこまで情報開示していいのかと聞く。

良いそう。というか次元漂流者の保護規定というものがあって、ある程度の情報開示は構わないそう。

そう、俺はその次元漂流者というものに当たるとらしい。

ただ……

「第130管理外世界？」

「こんな場所だよ。故郷ではないかね？」

空間に投影されたモニター、これも魔法らしいが。それに映ったのは少し緑がかった空を背景に映る石造りの町並みだった。手前には青い海が広がる。白亜の石造りの建物は地中海にこんな場所があると聞ければ信じてしまいかもしれない。よく見ると建築様式も全く違うし、建物に書かれている文字だろうものは全く読めない文字だったが。だが本当に驚いたのはそこではない。

歩いている人を見れば、服装などはどこか西欧ファンタジー的を思わせるような服装だ。ローブといえはいいのだろうか。ゆったりした服装に身を包み、サンダルを履いている。それも驚きではあるものの……その背中にある翼が一番の驚きだった。

歩いている人歩いている人は全て。大小、色の違いはあるものの、翼を持っている。

それはあまりに馬鹿げた光景で……、いや自分も人の事言えないというか言えなさすぎるのだが。

「……大丈夫かね？」

「ああ、いや、違う。違うんだ。俺の世界じゃない。普通の世界なんだ。地球だったんだ。気付いたらこんな姿になってたんだ。訳わからねえよ。何なんだよ。説明してくれよ。なんで羽根とか生えるんだよ」

気付けば平坦な声で思っている事を垂れ流していた。涙も出てこない。ただ眼前に映っている翼の生えている連中の姿を何となく見ている。

ああ、そうか。根拠も意味もなく……帰れる可能性があるとか、ちよつとでも縋っていたんだな。

ちよつとでも考えれば……こいつらが次元漂流者だと判断した理由はこの翼だろうに。

グレアムの爺さんは俺が垂れ流した言葉を聞いて、少し驚いたようにした後、何かを考えるように腕を組み、目をつむり、また指先を一つ鳴らすと言った。

「少し、話してみる、良い」

「なんで急にカタコトに？　というか、発音がまるつきり違うぞさつきと」

また一つ指を鳴らす。

「ああ、翻訳魔法を切ったのだよ。しかし、難しい日本語をそれだけ流暢に話せるということは嘘ではないようだね」

そんな魔法使ってたのか、何でもありだな魔法。

さて、この場合どうすべきか、とか首をひねっている爺さんをさておき、冷めてしまった紅茶を口に運ぶ。あんな世界見せられて、動揺して、まるっと全部話してしまった。あ、元男だったってのは話してないか。しかしこんな動揺する映像だっただろうか。指先が

まだ震えてる。落ち着け俺の右腕。

「君の事情は私にも正直、見当のつくものではない。……だが、そうだな。やはり一度管理局の保護プログラムに従う形ではあるが、しっかりとした検査を受けた方が良いのではないかな」

そこでさらにふむ？ と首をかしげると。

「もちろん、日本出身のようだしこの土地に既に馴染めているのなら、無理強いすることではないが」

いや、どこの常識だよ。この年で浮いた容姿持って土地に馴染めるってすごいぞ。

……割と生活は何とかなってるが。

「……お父様、そろそろ約束の時間ですよ」

猫娘、アリアというらしい、が声をかけてきた。

「む？ おお、そのようだ。すまないが不動産屋との約束があつてね」

と腰を上げる。正直聞き足りないものもあつたのだが……迂闊ながら、不満が顔に出てしまったのか、やれやれとでも言いたそうに苦笑すると、くしゃくしゃと頭を撫で回された。

「とてつもない借りがある友人が居てね、せめて小さい娘さんの為に家の一つでもプレゼントしてやりたいのだよ。少々君には暇なことになるからね」

ないがしろにしている訳ではないのだよ？ とあくまで子供扱いである。内心でちよつといらつとしてるのだが、表面に出すとまた頭を撫で回されそうである。くそう。

しかし家の一軒とはまあ正直。

「豪儀だな爺さん。リアル足長おじさんという奴か」  
「……そうであつたらどんなに良いだろうね」

何か言葉に違和感を覚えるも、見上げた時には先程と変わらない飄々とした顔だった。

考えがまとまったらこの電話番号に連絡したまえ、とメモを渡され、アリアさんに送られホテルを出た。送り狼ならぬ送り猫か。うん、実際この人は猫だったらしい。使い魔というもののようだが、どういう原理で人型になつてるのは知らない。きっと魔法というでたらめパワーだろう。

アリアさんには別れ際に声をかけられた。

「お父様はああ言つていたけど、あなたは保護された方がいいと思うの。結構精神状態不安定だったでしょ？ 管理局の医療はいろいろこの世界より進んでるところもあるから、当てにできると思う」

連絡は三日以内に頂戴ね、それ以後は出立しちゃうから。と言い、油断していたら別れ際にまた頭をクシャクシャと撫でられた。そういえば帽子……、ホテルに忘れたな。

アリアさんの姿が見えなくなると大きいため息をつく。  
精神的に疲れた。

時間に見ればわずか一時間ほどだったか……街角の時計を見て確認する。

頭を整理するためにひとまず家に帰ることにし、街を後にする。  
暑い中に汗で濡れた髪の不快感を感じだけがいつまでも後を引いて

いた。

## 八話

もう無意識にでも帰っていけるだろう、住み慣れたねぐらに戻り、勢いのまま布団にダイブした。

うつぶせのまましばらくその体勢でいると、眠りたくなってくる。何も考えずに寝て起きたら全てがすっきりしてるんじゃないか？

そんなありえない誘惑がふつふつと沸いてきた。

ああ、俺は弱いままだ。

この世界に来て割り切ったと思っていてもそんな割り切れるものじゃない。

考えたくもない事に蓋をして、見ないふり、臭わないふりをして、剣術に無理に没頭して。ずっとそれから顔を背け続けてきたが。

「すっかり掘り起こされたなあ……」

自分と同じ姿の人間たちが一杯いる風景。

自分は孤独ではないのだなとも思える反面、俺はあの風景には入っていけない異物だ。

あんなに動揺したのはその辺が理由だろうか？ 判らない。自己分析と言っても、あのにゃんこのアリアさんの言うとおり、精神的にはガタが来てる。判断力が酷いものになっていない保証がどこにある。

ははつと笑う。仰向けになり、天井を見た。安っぽいタン屋根の天井だ。

神様を馬鹿にするように舌をつきだしてみる。

何もない空間を仰向けのまま殴りつけてみる。

突きだした拳を緩め、一本一本指を開く。真っ白で小さな手。毎日の力仕事、家事、剣を振っているからか傷が絶えない。自分の手であると同時に『小さい』なんて思ってしまう手。

ふー、と息を吐きながらぱたんと手を下ろす。

この身体は借り物。

その可能性を思いつかなかったわけではない。ただ、考えればどんな底に落ち込んでしまいそうで、見ないようにしてきた。

自分という存在が何なのか。

「うわぁ、我ながら……」

文字通りうわぁである。なんと香ばしい。我に返った。ふっと何の前触れもなく我に返りました。

考えても仕方ないことをぐちぐちと考えすぎた。

頭を抱えて、バタ足をしながら転げ回りたくなる。

……うん、やることは既に決まっていた。

迷うわけもない。あのグレアムという爺さんについて行く。

確かにこちらの住み慣れた我が家、ようやく我が家とすんなり思えるようになったが。を残して行くのは忍びないが、この世界にいても知れることは限られているし、この姿と同じような連中が居るなら会ってみたい……とも思う。家族とかが名乗り上げてきたら、正直怖くて逃げ出さない保証はできないが。

「行くかつ」

ちよつと気合いを入れて無意味にはね起きる。渡されたメモを持ち、まだ蒸し暑い外に飛び出した。

「6時頃に待ち合わせをしようか、夕食は期待していてくれて構わないよ？」

と、いうことなので、手持ちの中でそれなりに見れる服を着て出  
発した。

フリーマーケットというものも侮れない。特に子供服などは成長  
に合わせて回転も激しいので、驚くほどの値段でひと揃いの衣服が  
揃ってしまうのだ。と言ってもさほど、今までとあまり代わり映え  
するわけでもない。上着にきているものがルーズシルエットのＴシ  
ヤツに下が黒のコットンパンツになっているだけである。ちなみに  
あわせて１００円ワンコイン。子供が買いに来たので安くしてくれ  
たのかもしれない。有り難いことだ。

指定された待ち合わせ場所に着くと既に、グレアムの爺さんにお  
供の二人が待っていた。

既に店に予約を入れてあるとのことで、のんびり歩きながら向か  
うことに。

しかし、前を歩く二人を見て改めて思うのだが、この認識阻害魔  
法というのはとても便利だと思う。魔導師や野生の動物のような勘  
の優れてるものには通じないらしいが。

なにしろ、耳も尻尾もまるで隠していないのに、誰も気付かない。  
……魔法なんてのが俺にも使えるようだったら教えてもらおう。最  
優先で。

「ふむ、やはり日本に来たならば、一度来てみたくてね」

着いた店は寿司屋だった。しかも頑固そうだ。黒光りする年代も  
の引き戸にエンジ色ののれんがかかっている。

開けると落ち着いた声でいらっしやいませと声をかけてくる穏や  
かそうな店主が居る。

ショーケースはなく、シンプルなカウンターに本日のお薦めと書  
かれた手書きのお品書きがある。

一言二言、言葉を交わし、奥の座敷に通される。

「旅行の記念に心ゆくまで美味しい寿司を頂きたくてね。まず大将の仕切りで四人前頼むよ」

暗に、金にうるさい事は言わないよ、なんて粋な注文をしてみせる。グレアム爺さんあんた何者だ。

座敷は四畳半の間で、こことカウンター席のみで店を回しているようだ。ちょっとしたらお茶を持ってきてくれたので、他愛もないことを話しながら待つ。

ただ、その待つ時間が問題だったのか。

「お腹すいたなー」

とロツテさん。この人はアリアさんの妹猫らしく、何とも直情的でこう、たまに俺の事を美味しいものを見るかのように見るので。

うん、お腹すいたなと言いながらこっち見んな。犬歯を光らせるな。尻尾が狩りの体勢になってるぞ。

冗談でやっているのは判ってるので、気にしないのが一番なんだが。

そんなことをしているうちに寿司を運んで来てくれる。

運んで来たのは若い店員さんだったが、どうやら息子さんらしい。外国人のようだからと適当に寿司を出すということもないようだ。

まずはあっさりとした鯛、ヒラメ、イカである。

そして、マグロ、甘エビ、ホタテと続き、穴子、ウニ、イクラ。

締め巻きのものはネギトロにカツパ巻き。ああ、やっぱり納豆出さなかったか……残念。

お茶を飲んで一息ついた。

何というかあつという間に食べてしまった。

とても久しぶりに食べた上等な寿司だったからか。

自分の事ながら食事でここまでこうなるとは安っぱさを感じないでもないのだが。

……とても満足してしまった。我ながら顔が緩んでいるのを感じる。けふあーなどと間延びしたげっぷが漏れた。

「これはこれは、何とも生魚がこれほど美味とはな」

「父様、父様、このイクラつてのもすごいよ」

「ちよつとロツテ、それは私の……」

この三人にも好評なようだ。

しかしふと思ったのだが……猫ってワサビ駄目じゃなかったっけ？ ……まあ、大丈夫ならいいや。

皆で食事を終え、お茶を飲みつつほつこりと食後ののんびり感を楽しむ。

さて、と一つ前置きをすると、グレアムの爺さんが真面目な顔になった。

目配せ一つ受け取って、アリアさんが何かぼそつと呟くと、空気？ が変わる。

「……ふむ、これも感知するかい？ 第130世界の人間はリンカーコアを持たないとデータ上ではなっていたが、どこにでも例外は居るということかな」

どこか嬉しそうに言う。

んー。異論はままあるが。

「というか、何を？」

「何、この部屋一帯に認識阻害の結界を張ってもらったのさ。もう少し強力なので封時結界というのものもあるのだがね、あれは少々大雑把にすぎて、隠蔽にはこちらの方が向いているのだよ」

さて、と前置いて、続ける。

「これで、少々お伽噺めいた、そしてちょっと安物のSF染みたお話をしても、外には世間話にしか聞こえないはずだ。昼間、話そびれた事でも話すことにしようか」

と言っても、もう、俺の意志は伝えてある。

本人の意志が確認できれば、次元漂流者の保護プログラムに従って、本局の置かれているミッドチルダというところで検査と書類申請すればいいらしい。

保護責任者にもなつてくれるというので、休暇中なのに悪いね、と言ったら、子供が遠慮するものではないよ、と言われた。

……あ、そう言えばまだその辺の事詳しく話してなかったか。

しかし、会ってたかだか一日でそこまで信用するというのもないや、どのみち検査……魔法は未知の部分多いし、ううむ。ごちゃごちゃ考えるのも面倒になってきたし、昼間の事考えれば今更かそれなりに長考していたらしい。視線がこちらを向いて、じっと待っているようだった。

うん。ぶつちやけることにした。下手の考え休むに似たりである。元、男であったこと。年齢も最低でも成人は越えていたと思う。普通に働いていて、いつかは記憶が曖昧だが少なくとも地球の未来軸……しかもパラレルワールドと思われる場所に居たこと。

言っていて、今話している事が自分の考えた妄想のような気もしてくるが。前世の話とかを信じ込んでしまっている小娘になった気がしてくる。

ただ、現実には小説より奇なりを地で行くような事も覚えているので、そこが……そこだけが妄想でないことの証明か。

世界貿易センタービルに旅客機で自爆テロとか、俺ではとうてい思いつくことではない。そして、21世紀になって急に増えた世界各国の巨大地震。スマトラ沖地震とかゼロから考えつくのはまず不可能だろう。と言っても、この地形すら違うパラレルワールドで果

たして同じ歴史をなぞるかにはまったく判らないのだが。

ここまで話したところで、グレアムの爺さんは頭痛をこらえるような顔をして額に手を当て考え込んでしまった。

整理中なんだろう。やはりこういった事例は魔法なんて事に関わっている管理局という所でもそうあるものではなかったか……

「確たることを言えるわけではないが……ロストログアと我々が呼んでいるものがある」

目をつむったまま、低い声でそんな事を言いだした。何か嫌な思い出でもあるのか、妙に迫力がある。

なんでもそのロストログアというものは過去に滅んだ文明の遺産なんだそうだが、時折、暴発して困った事態を引き起こす事も多い厄介なものらしい。ロストログア絡みの案件の心構えは「どんな事態も起きて当然」と言うことらしいからその厄介さは極めつけのようだ。

「俺の状態はそのロストログアが絡んでいる可能性大？」

「……もちろん、君自身の特性、あるいは自然現象、またはどこぞの変人科学者が妙な実験でも試してみたのか、可能性を言っていたらきりがないがね」

こんなことを言うとクラナガンの学者連中には笑われてしまうのだが、と少し苦笑し。

「この世界……管理局には第97管理外世界と呼ばれているのだが、この世界特有のレイラインと言うものの存在を私は信じていてね。ロンドンやここ、海鳴の地はその吹きだまりのようなんだ」

デバイス未使用で魔法を使うと、この地の魔力流に微弱な一定の

流れが集約していることに気付くそう。そのレイラインが呼び水となってロストログアが集まりやすい状態になったり、住人に魔導師の資質を開花させてしまう可能性はあるんじゃないか、この現象を自然科学のように魔法力学からの観点で解き明かしていけばきっと面白い事が……とそこまで熱く語ったところでふと我に返ったのか。

「……む、まあ、年寄りの与太話だ。話半分にな」

耳が少し赤くなっているが。見ないことにする。男はいつだって夢を見ていたいものよな。気持ちには判るぜ爺さん。

気を取り直すかのように、言葉が続けた。

「君のその事情については……私も多少心当たりはあるので調べておくとうか。管理局で検査を受ける時にもそう問題はないだろう。精神干渉の魔法による被害者への治療というのかもしれないが、ことだ。ただ、精神と体に齟齬が出ないかの検査は多くなるとは思うがね」

何というかこの爺さん異様に頼りになる。管理局員ってなこんな奴ばっかなのだろうか。

気がつけば随分話し込んでしまった。店を出れば夏の薄ぼんやりとした月が高く昇っている。

管理局への出立は先だってアリアさんが言っていたように三日後らしい。

「しばらく、この世界に戻ってくることも難しくなるから、急だとは思うが身の回りの支度をしっかりしてきなさい」

との事である。多分この世界で、誰かの世話になっているのだと

思ったのだろうが、残念。ほぼ身一つの生活だ。挨拶すべき人は居るが、そう荷造りするほどの物などは最初から持ち合わせていない。とはいえ、綺麗にしてから行けるならその方がいいか。

明日明後日は掃除と挨拶回りに費やされる事になりそうだった。

まだ暗い早朝からの掃除を終え、綺麗にした室内を見回す。

うん。三ヶ月ちよいとは言え、世話になった家だ。雨漏りしては修理し、風で戸が外れては修理し、の手間がひどくかかった家だったが、自分の手一つでここまで整えたねぐらなので、やはり感慨もひとしおである。山の稜線からそろそろと顔を覗かせる太陽を見て、そろそろ行けば丁度いいかと思い、いつもの木刀をひっさげ、動きやすいように髪をバンダナで纏める。

軒先で頬をぱんと叩き気合いを入れる。今日は勝つ。……という気分で行く。

定例となっている神社での早朝鍛錬である。最近では何とか恭也には躲されるより打ち合うか、逸らされる事が多くなった。未だに一度も当てた事がないが。

美由希相手なら力で押し切れる……が、体のスペックでのごり押しというのはとてもあれだ。うん。すごく釈然としない。

そんな美由希も才能は俺なんかより余程潤沢にあるようで、一つの技や型を覚えるのは遅いものの、一つ覚えてしまふとそれが崩れない。

恭也が思わず愚痴ってしまうほどの才能らしい。俺ぐらいの年ごろになれば今の俺よりずっと上なんだろうなと、背中を煤けさせながら言っていた言葉は忘れない。後々でのからかいの種として。

「というわけで、ちょっと今日は気合い入れていくぞ恭也ア！」

「何が、というわけなのか知らんが。来い」

ともあれデッドヒートが繰り広げられるわけもなく。

いつも通り脳天をスパーンとされ、ぐもおおおっと地面を転げ回った。気合いや気力でいきなりパワーアップするのは主人公の特権だったらしい。

「ぬー。最後まで御神の技とやらも出させられなかったか」

「最後？」

明日引越すんだよ、と言うと、心持ち寂しげに「そうか」とだけ返してきた。どこまでもこいつらしい。

美由希にも挨拶しないかなと思って見ると。

「……遠くに行っちゃうの？」

目が潤んではる。いや、ちょっと、これどうすれば？ お、おう？ などと自分で言っても慌ててるだろう声が出る。アイコンタクトで恭也に助けを求めるとニヤニヤ笑っている。おい、妹が泣きそうだぞ、それでいいのか高町兄よ。

「あ、ああ、ええとな。また会えるし、落ち着いたら手紙出すからな？」

「……よかった……友達また……居なくなっちゃうかって……」

あぐあぐしておられる……何か気付かぬうちに地雷を踏んでいたようだった。

あーよしよしと子供をあやすように軽く抱いて頭の後ろをぽんぽんする。

しばらくして……泣き止んだ頃には妙に顔が赤かった。

美由希の後ろで恭也がさらにニヤニヤしている。こいつ案外人を

おちよくるの好きだろ？

……恥ずかしがってるだけだよな、美由希は？

「かーさんが言っていたが女は小さくても女だそうだ」

そんな事をぼそつと恭也が耳打ちしてきた。

いや、それ言われたのお前だろ？

「それとな、その木刀はやる。餞別だ」

さりげなく進呈された。むう、俺からも何かやりたいが……そうだな。

「恭也、美由希ちゃん。二人に秘密基地を進呈だ」

怪訝な顔をする二人に俺の整えたねぐら、廃工場の場所を教え、森に近いし、何より人目を気にする必要がない。修行場に最適だぞ。ただし、行くなら明後日からな。と言っておく。

神社以上に人の気がないからなあそこ。これから美由希もぐんぐん恭也のような変態的な機動をする剣士になっていくのだろうし、十分に暴れられる修行場は必要だろう。

高町兄妹との挨拶を終えた後も、いろいろと挨拶回りは続いた。

三ヶ月も生活していればそれなりに人付き合いというものも出来てくるというものだ。

空き地の子供たち、何故か最近任侠映画でも見たのか会ったび仁義を切ってくる安田。結局、調子に乗ると空気が読めなくなる癖が直らなかった南部。

商売相手の釣り場のおっちゃん達、砂浜でバーベキューによく来ていた大学生グループ。

弁当屋のおかみさん。フリーマーケットのお姉さん。

……あ、そういえば、両親がやっているとかいって喫茶屋だったか、美由希から誘われてたけど行くのを忘れていたな。

しばらく前に、高町夫婦のピンクオーラによる恭也の煤けっぷりを見て以来、何となく避けていたのかもしれない。

今思えば、恭也が武者修行とか時代錯誤の事をしていた頃、美由希は何だかんだと理由をつけて外に居たがったが、あれもそうだったのだろうか……

両親が仲むつまじいのは良いことなので頑張れとしか言いようがないのだが。

一通り回り終え、ねぐらに帰ったのはもう日も傾きかけている時間だった。

軒先に干してある魚が目に入る。……これも何とかしないとな。一つ思いついた。

昨日の夜は美味しい食事を頂いたので、今度はこっちから馳走することしよう。猫の好きそうなものばかりあるし。思いついたら即電話である。ついでに、少し散財して付け合わせとワインでも買ってくるとうしよう。

どんなメニューにするかなどをつらつらと考えながら、最寄りのデパートに足を向けた。

俺の先導により招かれて早々、目を塞いで天を仰いだのはグレアムの爺さんだった。ひどいリアクションだった。この、門を抜けてすぐ目に入るぼろぼろの廃工場見れば気持ちも判るけどね。

どんな暮らしをしていたんだと聞かれたので、正直に話すとオウジーザス……とか小声で漏らしていた、感心はちよつとされるかもと思ってたが、そこまで驚きポイントが……？

首をひねってても仕方がないので、奥の小屋近くに設置した、食器棚を改造して作ったテーブルにつかせて料理を運ぶ。

と言っても時間もなかったしさほど、複雑なことはいない。

付け合わせの生野菜のサラダや、パン、チーズ程度である。

メインディッシュは肉、魚の一斉在庫放出である。

竈にかけられて程よく熱された網の上に油を塗りつけ、適当に切った肉、魚を置いていく。しかしリーゼ姉妹の視線がすごいことになっている。ロツテさんなどは俺が焼いているすぐ後ろでうずうずと見ているのだが、少々身の危険を感じないでもない。

ちなみに最初は鴨肉だ。野性味溢れる鴨肉はこうやって炭火で焼き鳥にして塩胡椒でシンプルに食べるのが一番旨いと思う。昨日捕まえ、今朝方絞めたものだ。

おっと、爺さんには脂がきついかもしれないので切ったレモンの皿を出しておくか。

夏場なので後は塩漬け肉や燻製肉、魚のスモークになってしまいが、どれも野趣溢れるもので、猫姉妹にはとても好評だった。

ワインはせいぜいがボルドーの有名どころくらいしか知らないの、酒コーナーで店員に聞いて適当に買ってきたものだったが、そう外れではなかったようにゆったりとしたペースながらも着実に減っていった。というか、英国人には足りなかったか？ 英国人という、こうパブで大ジョッキを傾けているイメージがあるな。

そんなことを思いながらグラスに口をつける。

水だと思ったら残念、ワインだったんだ。そう、これは事故以外の何者でもない。旨い。子供ボディだからと自重してたまるものか。対面でグレアムの爺さんがおややおやとか笑っている。

ちなみにリーゼ姉妹は二人、猫形態なので二匹か？ で、もつれあつてごろにゃんしている。理由は簡単デザートに出したキウイフルーツの効果だ。そう、マタタビ科マタタビ属和名オニマタタビのキウイフルーツである。ちよつとした悪戯心だったがこれほど効果があるとは……今度またやろう。カメラでこの姿を残せないのが心底残念だ。

「今日は、楽しませてもらったよ。娘達もあれ以来なかなか心からリラックスできなかったようだしね」

もつれ合って戯れているリーゼ姉妹を見て微笑むグレアムの爺様。見た感じも言葉も好々爺といった感じなのにどこかで硬いところがあるような……わからん。

少しふわふわしたものを感ずる。

……酔ったか。あれしきで。悔しい。でも感じちゃうびくんびくん。テンションが変である。まあ、楽しめたというなら。

「それなら、良かったよー。歓迎した甲斐があるあね」

「ところで、君の保護にあたって申請する名前が必要になるのだが

……」

「……名前？ ああ、適当に付けちゃったしね」

にやりとグレアムの爺さんは笑い。

「とても君にぴったりの名前を思いついたのだよ。差し支えがなければ私につけさせて貰えないかね？」

いかん、睡魔が。スイマーが……

「あー……ツバサって呼んでくれる人も居るから、そんだけ残してくれれば……好きにして……」

「ふむ、では決まりだな」

あれ、何かデジャビュが……あれ？

「生命に溢れる野生児の君にはその性を補う名前を……『理性』の意味を持つティーノと名付けよう」

うん、これなら見た目通りなかなか可愛らしい響きだ、などとおっしゃる。……て、ええ？

「さて、出立は明日の午前だ。ここの後片付けは私たちに任せて子供は眠りなさい」

「ぬ……む、客にやらせるわけには」

「アリア、この子を寝場所に連れて行ってあげなさい」

はいお父様、とアリアさん。いつの間に復活を……いや、それよりな、まえ。

そして有無を言わず布団に入れられ、その心地よさでいつしか意識はとろけてしまった。

「しまったアーツ！」

そんな自分の叫びで目を覚ました。  
ばっちり覚えている。

酒に酔って、眠くなっていたとこで、名前を……

いや、自分のネーミングセンスとかはかなりどうかと思ってたので、人の名前にケチつけれる筋合いはないんだが。

うむ。何か釈然としない。

「ティーノ……ていの……なあ？」

名前の響きを舌で転がしてみる。

確かに見た目日本人じゃないから良いの……か？

ただあからさまにこう、外国系の名前は違和感がすごいというか

……急に妙なあだ名でもつけられたかのような心持ちになる。

もつとも、アリスとかシルヴィアとかあからさまな女性名でない分まだグラム爺様の優しさなのだろうか？

惜しむらくは濁点。ディーノだったら普通に居そうだ。

外に出ると既に日が昇っていた。

日頃の習慣を考えるとびっくりするくらい寝坊だ。

どうもこの身体のアルコール代謝はよろしくないらしかった。

「ふむ、起きたかね？ おはよう」

何とすでに家の前に三人とも来ていた。

そつえば出立は確かに午前とか言っていたような気がした。

「あー、おはようさん。えーと、荷物はもう纏めてあるから、身支度だけするんで20分ほどまってるな」

「何、慌てないでも構わんよ」

と言われても、実際のところ荷物といっても精々使えそうな服とか木刀、ちよつとした覚え書き程度である。バッグ一つで収まっている。

くみ置きの水で顔と頭を洗い、体を拭く。身支度を調べ、それで準備は完了である。

何でも、その管理局へ行くには次元港がある世界までひとまず魔法で転移してから、入管手続きの後行くことになるらしい。

「さて、行ったらしばらくはこの世界に来ることも出来ないだろう。やり残しはないかね？」

思い出した事があり、ちよつと待って貰う。

今まですごしたねぐらに向かって手を合わせ感謝。

「ありがとうございました」

一拍置いて背を向け、三人の足元に広がる魔方陣に足を乗せる。目で、良いかね？ と確認してくるので大きく頷いた。

さて、これから行くところはどんな場所なのか。

繋がっている道先は見えないものの、踏み出す方向は見えたようだった。

歩くだけ歩いてみましょう。

## 八話（後書き）

野生児↓命名  
の伏線回収。

そしてその命名がまた見え見えの伏線になったりしていますが、ひとまずこれで一部というか起承転結のうち起は終了です。

## 幕間一

無機質な電子音が幾重にも重なり、その狭く暗い部屋に反響する。ぽこり、ぽこり、と培養槽の中を攪拌する気泡が生まれては消えてゆく。

あまりに幼すぎる少女の全身には不似合いで不格好なチューブが絡みついていてた。

時折生まれたての雛が首を伸ばし羽根を伸ばすかのように、少女もその背中の小さな翼を伸ばし、顎を上げ小さなあくびをした。いつしか白衣を着た男がその培養槽の前に立っている。

まるで宝物のように少女を見つめ、そつと無機質なガラスの筒を撫でる。

どこか少年期を抜けきらないかのようなその目が大きく開き、細くなる。

いつからだっただろうか、少女はそのまどろみからゆっくりと抜け出していく。

髪の色と同じ色の長い睫が浮かび上がってきた気泡に揺らされた。まぶたが恐る恐るでもいったかのように開き始め、やがて、虚ろに開いているだけの目は焦点を結んでいく。

白衣の男は何かに耐えかねたかのように一つ身震いをすると言った。

「おはよう」

少女を最大限歓迎するかのように、両手を広げ、慣れない笑顔さえ浮かべこう言った。

「おはよう……はじめまして、アドニア」

幸福を招くアドニスの花言葉から取ったんだ、と理解できようはずもないのに話しかける。

こんな花だよ、と慌ててその明るく輝く黄色の造花を胸のポケットから取りだそうとして――落としてしまった。

あ、あ、と慌てながら落下途中に手を出し、受け止めようとする。かろうじて両手で受け止められると、ほっと息を吐き、それを少女の目の前に差し出した。

「本物でなくてすまないね。本物は太陽のように綺麗なんだよ」

何が気に入ったのか少女はその培養槽の中で手を伸ばす。

ただ真似をしているだけなのかもしれない。

男がその調子でしばらく寝物語のような、一人語りのような他愛もない話をしていると、いつしか少女のまぶたは再び落ちていた。

男はその寝顔を飽きることなく見続け、一つため息をつく。  
瞑目し――目を開けた時、何かを捨て、何かを決めた目になっていた。

ガラスの中の小さな少女に語りかける。

「ねえ、アドニア……僕の子よ……僕はどんなことになるうとも君を守るよ。例え」

男は唾を飲み込んだ。ごくんという音がその静かな部屋にやけに響いた。

「例えどんなことをしようとも」

## 九話

「いや……いやいやいや、なにこれあり得ん」

何という事か……今日はとてつもなく夢見が悪かった。

少女と一見、科学者の夢だったが、あれか、父とか欲しい年頃なのか？ 深層心理とか確かめたくない……な。

というか台詞回しといい何というか、頭を抱えてベッドを転げ回りにたくなってくる。

いや既に転がったが。頭抱えてうわぁーと。

「ひ……ひどい目覚めだ……」

唸りつつ、顔を洗いに一階の洗面所まで降りて行く。吹き抜けになっている階段を下りていく途中の窓から外を見た。また、今日も見事な朝もやなこと……

ここミッドチルダ東部の山間いは夏になってもそれなりに涼しい。過ごしやすいとは言えるのだが、毎朝冷たいもやが立ちこめるともう涼しいを通り越して、肌寒さすら感じる事もしばしばなのだった。

水で顔を洗って気分をすっきりさせる。

洗面所の鏡を見ると、美人なのに適当な表情のせいで三枚目な姿が映っている。切ろうとするとなぜか妹たちが悲しげになるのになかなか切れず、いつの間にかセミロングと言えるくらいまで伸びてしまった髪を後ろで纏めて髪ゴムで縛る。

勝手口に傘と一緒に置いてある馴染みの木刀を持って庭先に。

早朝のしんと静まりかえる空気が気持ち良い。

バランスを取るように体の正中線の延長で木刀を片手で持ち、真上に振り上げ、正面に振り下ろす。

——思った通りの線を木刀が通ることができた。今日は夢見のわりに調子が良いようだ。

ふっと止めていた息を吐き、素振りを始める。

ただ、無心に振る。

そのうちにとりともない事が頭に浮かんで消えた。

もうこの庭先での毎日の日課を繰り返し、一年。

それなりに充実した日々のせいか、ちょっと昔にすら感じてしま  
うが。

あの、故郷とは酷く似ていて、でも少し違う『地球』を離れてか  
らの事を思い出す。

グレアムの爺様に連れられ、行くことになったのは時空管理局本  
局とか呼ばれているスペースコロニーだった。

次元航行船の中から初めて見た時はそりや驚いた。魔法とか魔法  
とか魔法とか言ってたのに、目に映るものはSFである。何という  
魔法詐欺か。……もっとも、航行船とか局員が使っているデバイス  
とかで何となく予想はついていたのだが。

次元漂流者としての登録を終えた後はひたすら検査、検査、検査  
である。

俺のような例は今までに無いそうで、覚えている限りの事を話せ  
させられるわ、やたら細かい精神診断をやらされるわ、身体の立体  
スキャンはもとより、内蔵や脳機能まで検査である。

グレアムの爺さんが話していた、精神干渉型の魔法というのも試  
してみるも、難しい顔でかぶりを振っていた。渋る医者に頼んで聞  
き出してみると、人間の精神構造じゃないとか……これは凹んだ。  
精神診断ではとりたてて異常な結果がでなかっただけに凹んだ。と  
言っても聞けばサイコパスとかそういうことでなく、処理をする脳  
に過負荷がかかって普通ならとつくに死亡。最良で植物状態とか言

われた。一部の記憶が段々薄れて行っただけだ。それはそのせいかもしれないとか。普通に動いているのが奇跡というより一周回って悪魔の悪戯めいていると。……何それ怖いである。正直少し漏れた。

「管理局の技術なら何とかなると思ったのだけど……ごめんなさいね」

検査の為にあてがわれている部屋まで戻ると、付き添いをしてくれたアリアさんが眉を八の字にしてすまなげに言った。

……ああ、局の医療なら当てにできるとか言ってた事が。

へたれた猫耳が反則だ。全力で愛でたい。

あ、いや。

「？」

実のところ、そちらは気にしていないし、自分の心の問題はやはり自分で解決したいので、無問題。……いや無問題ではないが、びびっても仕方ないというか。大分前に開き直ったことでもある。

むしろ、自分の身体の事が知れて良かったよと言っておいた。

これはへたれ耳猫さんへのサービス精神などでなく、本音だ。

この身体が標準より力強い身体なのは知っていたが、データに示されると驚くばかりだったのだ。

筋密度が違う、骨密度が違う。そもそも染色体が違う……どこのオーガー族かと。翼がひょっこり背中に生えてる通り、純粹な人間ではないらしい。どちらかというと亜種。

ただ、この管理局というところは様々な世界に接触するだけあって、そこの認識は曖昧なようだ。

極端な話、頭が一個手足があつて言葉と意思疎通ができれば人間という扱いっぽい。ありがたいが何ともアバウトな話だった。

医者としてはフィジカル面の方はあまり珍しくもないデータらし

いが、ちょい前まで普通の人間をやっていた俺としてはちよつと興奮である。目先の事に集中して肉体面での確認をしなかったのが悔やまれるくらいだった。うん、いずれ分厚いステーキ肉を焼いて「モニユ……ムグ……」と食べてみる事にしよう。

「そういえば、今更なんだけどグレアムの爺さんって実は大物だったりする？」

と、アリアさんに聞いてみる。

そう、実はこの本局に来て判ったのだが、あの爺さんやたら敬礼されるのだ。前言つてたトップ魔導師とかつてそんなに凄いのか。それに、俺自身は書類申請のために一回入ったきりだが、やたら立派な一室を使っていたものだった。

アリアさんは人差し指を唇に当て、小首をかしげている。何か思い返しているようだった。

「あ、そう言えばまだお父様の事を詳しく話してなかったかもね」

聞けば提督さんらしい。歴戦の勇士らしい。艦隊指揮官であつたこともあり、執務官の長でもあつたらしい。

いや、管理局の役職名とかよく判らないんだが、何だか字面だけでも凄そうである。

んー、何だか凄そうだが、ぱつとこない。しかしそれって俺もグレアム提督と呼んだ方が良いだろうか？

その事を聞いてみると。

「人前でなければ、好きに呼んでいいと思うよ？ お父様も何だかその率直な物言いがかえって気に入ってたみたいだから」

人前だと提督と呼ばれるのも仕事のうちだから駄目だけどね、と

言い残し、こちらの頭を一撫ですると部屋から出ていった。仕事らしい。

部屋から誰もいなくなると俺はベッドにぼふりと身を埋めた。サイドテーブルに置いてある魔法が使えない人向けの情報端末を手に取り、暇つぶしも兼ねて特に目的もなく雑多な事を調べていくと言つても、何分言葉が読めない。ミッド語とか言つらしい。翻訳ソフトを通してながら眺めているのだが、やはりちよつとでも本格的に知りたいならミッド語の勉強は必須のようである。

実は妙な新種のウイルスだの細菌だのがついてないかの検査結果がでるまで病棟から出られない事になっているので、暇なのだ。

『猿でも判るミッドチルダの言葉』という差し入れされた本を取り出す。猿か……鳥でも理解できるだろうか？ 本当に鳥頭になつていないことを祈りつつ、久方ぶりの勉強を始めた。

そんな事をしつつ一ヶ月。

一通りの検査も終え、出た結果は、色素異常以外は特に健康面、精神面共に異常なしとのこと。というか精神面の方は常識の埒外だったので……匙を投げたらしい。ともあれ、安定はしているそうなので今すぐどうこうと言つたものではないとのこと。

それと、一応、こちらの地球で同じ事が起きるのか判らないが、この先起こるテロや地震についての事を言つと、考えない方がいいとのことだった。

考えてみたら当然かも知れない。俺の話した事を鵜呑みにしたところで、パラレルワールドで起こった事が地形すら違う、歴史も恐らく違うだろうこちらの地球で同じく起こるとは考えにくいし、そもそもパラレルワールドを考えるより他の可能性……例えば違法研究者による記憶や精神に関わる実験、ロストログアによる記憶、精神への干渉を疑われているようだ。

色素異常については語るまでもないだろう、アルビノ状態のことだ。ついでに虹彩異色症、オッドアイと呼ばれるそれだが、も患つ

ている。

こちらはカラーコンタクトの着用と肌の保護クリームを渡された。これらはどちらも紫外線のほとんどを遮ってくれるそうで、かつ体への負担もほぼゼロ。コンタクトはつけっぱなしにして寝ても一ヶ月は保証、クリームは通常の保湿クリームとして毎日使っても良いそう。……地球のそれより遙かに進んでいる。妙なところで技術差を感じてしまった。ともあれ有り難く使わせてもらおう。

ミッドの言葉というものにも大分慣れてきた。人間成せば成るとはよく言ったもので、医者と話す時以外は翻訳装置も外して、暇な時にはひたすら端末でニュースだの何だのをちまちま辞書を使って翻訳。気付いていたならそれなりに馴染んでいて、専門用語や変な言い回しは苦手だが、日常会話くらいなら既に何とかなるし、文字も子供の読む絵本くらいなら何とかなつた。

この検査を終えた後の予定だが、そこは管理局の保護プログラムである程度規定されているらしく……というか、見た目じゃなくて16くらいで申請すればよかったか？ 10歳という申請年齢のために児童養護施設に入ることになった。グレアム爺さんは少しすまなさげにしていたが。これは……うん。俺も考え無しだった。申請するときに見た目通りでいいんじゃない？ とか軽々しく記入してしまったから。数ヶ月も子供扱いされて生活してた弊害が出てしまった。今思えば種族特性なんですとか言えば多分20と言っても通る事が判るが後の祭りだ。

養護施設については爺さんの肝いりで、というか後援しているらしい施設を紹介してもらって運びになった。

来た場所はミッドチルダ……管理局の発祥した世界で、本局とは別の意味で本拠地とも言うべき世界だとか。その東部11区画という場所らしい。

魔法の普及した世界らしいが、別に人がびゅんびゅん飛んでいるわけでもなく、交通機関は地球とそれほど変わるわけでもなかった。

ただ、化石燃料を使っているわけでもなさそうで、やたら静音なバスから降りると結構な山間이었다。北東と北西に大きな山が見える。二つの山に挟まれる形のふもとらしい。隣あった12区画が観光地、第10区画が工業地になっており、そこに働きに出る人のベッドタウンになっているそう。元は田園地帯で果樹栽培も下火とはいえ未だに有名ならしい。

10分程歩いた所にログハウス風の洋館があった。かなり大きい。開かれた門の向こうには中々見晴らしの良い庭になっていて、整えられた花壇が彩りを添えている。

「いらつしゃい。そろそろ来る頃だと思っていたわ」

門の前で出迎えてくれたのは一言で言えば、品の良いお婆さん。

真っ白な髪に皺の刻まれた顔。グレーの瞳を細めて柔和な笑みを浮かべている。背筋はぴんと伸びており、こちらにゆつくりと歩みよってくる姿も微塵もゆらぎが感じられなかった。

グレアムの爺さんは余程親しいのか、やあ、しばらく。と声をかける。

「この子が例の子。ティーノだよ。結局、局の検査では何も判らないも同然だった。まあ、扱いは難しくなるだろうがよろしく頼むよ」  
「扱いって……爺さん、俺はそんなに手間かけさせるつもりはないよ？」

ひとしきり軽口を叩いていたら苦笑された。

「初めまして、ティーノ。私が当院長カラベル・アルメーラですよ。あなたの事情は提督から伺ってるわ。これからよろしくお願いしますね」

そう言つて俺の前にしゃがみこみ、微笑んだ。くしゃりと頭に手を置かれたので何ぞやと爺さんを見る。何か悪戯でも思いついたかのように口元が笑っている。

「カラベルさんはかつてベルカ貴族達の教師をしていた事もあつてな。様々な分野に精通している万能の教師のような人だ。君は分別こそあるものの知らない事が多いだろうからね、万事教えてもらうといい。……そうだな、私からも頼むよカラベルさん。この子の道行きも、あの子達に負けず劣らず苦勞をしそうではあるからね」

その時はまったく思つてもいなかった。

「ええ、任せて頂きましょう。私の名誉にかけて立派に育てあげてみせますから」

——淑女教育などが始まるなどとは。

「今思えば、あの時どんな手を使つても強固に反対しておけばよかったのだろうか……」

時にそんなことを思つたことも2度、3度ではない。

むしろ20度、30度となく思つたものだ。おおむね遠い目をしながら。

最初にカラベル先生、今は先生と呼んでいる、が提督から事情を聞いていたと言うのは嘘ではなかったらしく、今はこんな体だとしても数ヶ月前は男性として生きていた記憶があると言うことも知っていた。その上で動じず揺るがず「それがどうしましたか？」などと、さらりと言われて口をぱくぱくさせて絶句してしまったのは未だに覚えている。

そんなことは前提の上で、人の世とうまく付き合つてゆくために

はまずは自分の身体ともうまく付き合うこと……らしい。

「厳密には違いかもかもしれませんが、私が性同一性障害の子を見てきたのも二人、三人ではありません」

まずは、嘘だと思ってもいいですから一週間ほど続けてみましょう。などと言われ、つい頷いてしまったのが運の尽きだったのかも知れない。

教え方が上手すぎるのだ、この人。

決して厳しいとは言えない。ただ、どこをどういじれば人がどう伸びるのかを把握し、手の平の上に乗っている事を感じさせずに手の上で転がす。そんな先生だったのだ。

いや、それは責任転嫁というものか。

カラベル先生の教え方がとても巧みであったのは間違いないが、砂地に水が染みこむように馴染んでいつてしまったのは『私』という存在だ。

これが、精神は身体に依るという事なのだろうか。

もっとも、女性として見られること、女性として振る舞うことに抵抗がなくなつた程度なので、実のところあまり変わってないのかもしれないが。

さらに、自分の身体の使い方というものも判ってきたような気がする。今思えば地球にいた頃の身体の動かし方というのは本当に力任せだったという事が判る。当然だ。男性と女性の身体では使い方に違いがある。意識が変わるだけでも相当に動かしやすくなっていた。

ちなみにカラベル先生に教えてもらったのは、そんな事だけでなく、例えばミッドにおける一般常識、例えば言語、例えば歴史、例えば文化、例えば数学、例えば科学。

あの人は本当に万能の先生だった。

もう70を越えているらしいが、背筋を曲げて年寄り臭い動きは

一切しないし、何でこんな田舎の養護施設の院長などしているのだ  
ろうか、一々不思議でもあった。もっともそれは後々になって、こ  
の人でないと収めきれないからというのが判ってきたのではあるが。

「ふッ」

早朝の素振り、その最後を吐息と共に放つ。

それまでは空気を裂いた音がしていた切っ先が、空気を切った甲  
高い音になる。銃の弾が通り過ぎるような高い音だ。

この剣速だけなら恭也にも負けない自信はある。とは言え柔よく  
剛を制すというか、読まれてあつまり躲されるイメージしか沸かな  
いのが癪でもあるが。

何とも悔しい。うん、別に男だろうが女だろうが悔しいというの  
に違いはなかった。別に恭也みたく剣が命ってわけではないが、い  
つか一発いいのを入れて凹ましてやりたい。

一応の残心を終えると、大きく息を吐く。

汗が一気に噴き出してきた。

素振り中は汗も出てこないのに毎度不思議なもんだ。とりあえず  
柵にかけてあるタオルで拭く。

辺りを見回せば漂って居た朝もやもなくなり、見晴らしが良くな  
っている。おなじみの新聞屋さんが来たので受け取り、そろそろ良  
い時間なので子供たちを起こしに行くとする。

二階の子供部屋へ行くと大人しい子なのにやたら寝相の悪いラフ  
イがベッドから落ちていた。持ち上げてベッドに一旦降ろしてから  
声をかける。

「おはよー、ラフィ。はいはい、しっかり起きてね」

「……ティノ姉、おふぁ……よ」

おはように欠伸が混じったようだ。カーテンと窓を開けて涼しい風を入れる。

「じゃあ、いつも通りラフィはこの部屋の皆を起こして」  
「うーい」

とまあ、年少組は大部屋で寝ているので、中の年長さんに起こしてもらうのが決まりとなっている。

隣の部屋に行つて、ベッドにかがみこみ、揺する。ちなみに先のラフィもこのティンバーも同い年の8歳だ。

「ティンバー、朝だよー……お？」

えーと、何と云えばいいか。  
胸を捕まれているのだが……11歳児の胸触つて何が楽しいんだ。  
悪戯でこつというのは鉄板だつてのは判るんだが。

「ティーノのつるぺた揉んだぜー」

「あー……十分堪能したか？ んじゃお仕置きね」  
「ぐぼオツ」

将来セクハラ男になつてはいかんで、一応ゲンコツを落としておく。

「はいはい、痛い痛い痛い痛い残りー」  
「飛んでいかないのかよっ！」

ぶーたれるティンバーのたんこぶを撫でながら魔法の言葉をささやいてやる。そりやお仕置きだからねえ。

ラフィに言ったのと同じように皆を起こすようにと言って部屋を出る。

10歳以上は自分で起きる事になっているので、子供の目覚まし時計役はこれで終了である。

ちなみに私も含めて10歳以上の5人はそれぞれ狭いながら個室を割り振られている。

その一室のドアが開いてぼーとした顔が出てきた。

「おはようデユネット」

「……」

何も見えていないかのようにふらふらと歩いていく。

……まあ、いつもの事だ。

さて、今日は料理当番の日なので、これから朝食の時間である。

一階のキッチンに行き、共用のエプロンを装着。

早くも気分が乗りはじめると出てくる鼻歌を歌いながら、献立を即興で考え始める。

まずはとりあえずのサラダ。これは適当に生野菜をちぎってドカ盛りによければいいので楽だ。

昨日の夕食に出たロールキャベツが残っているので、コーンスターチでとろみをつけ、オレガノを少々。煮詰めておく。冷凍にしておいたパイ生地の上にそれを乗せ、チーズをかけてパイで挟んでオーブンでこんがり。その間に色々昨日の残っていた野菜をブイヨンで煮て、牛乳とバターを加え火を止める。さらに煮ている間に卵を人数分割って生ミルクを少し混ぜ、ベーコン、人参、ブロッコリ、タマネギを一口サイズに切って一緒にした後、火をとめたミルクスープを降ろして、フライパン二つを使って交互にオムレツを焼いていく。

この辺りで朝の掃除を終えて皆が食卓に集まり始めたので、出来たオムレツを運んでもらいながら人数分をひたすら焼く。

その数一六枚。火力があるので一枚一枚はあっという間に焼けるのだが、やはり枚数があるので多少時間がかかるな。

焼き終わったところにはオーブンのロールキャベツ入りパイも出来上がる。

スープを軽く温め直して配れば今日の朝食は完成である。

手を拭いて食卓についた時には、うむ。幼少組の反応がかなり良さそうだった。子供ってパイ好きだよね。チーズたっぷりなの奴。さて。

ミッドには宗教色というのはあまりないので、食前の祈りみたいなのではないのだが。

「今日の糧を得られた事をあなたたちの神様、私たちの神様、育んでくれるこの地に感謝して頂きましょう」

と先生が穏やかに言う祈りが食事の合図だ。

これにはこの養護施設には沢山の子女が多いのが関係している。管理局に保護される子供は数多いが、特殊な事情。例えば私のように何もかも原因不明のままひょっこり現れ、検査すればするほど意味不明な子供など、通常の養護施設に入れる事が難しいものが割と集まっている。中にはただの問題児もいるが。その為出身地方や考え方、宗教にもばらつきが多いので、こんな食事の合図になったらしい。

私は私で、おなじみの「いただきます」をやってから食べるのだが、小さい子はこのシンプルなのが判りやすく、だんだん勢力を拡大中である。

食事が終われば、次は一服の休憩の後、座学だ。幼年組はかつて初等学校で教鞭をとっていたという近所のお婆さんが来て、ボラunteアで面倒を見てくれる事になっている。

私を含めた10歳以上の子は学力にもバラつきが凄いのので、カラ

ベル先生による個別授業という形になっている。

一年も経っているんで、それなりに覚えることができたのだが、得手不得手はやはりあるようで……自然科学、社会、歴史は軒並みいい点数だったのだが、数学、国語、科学は鳴かず飛ばずだったりする。国語と言ってもミッド語の話だ。どちらかというと英語に近い表音文字で、話す分には問題ないものの、文学表現などを読み解け、とかになるともうお手上げである。数学、科学は……言うに及ばず。

午前の座学が終われば、昼食の時間だった。軽めにパンとチーズ、果物で済ませ、幼年組はお昼寝の時間、その他は実習だった。私などは要するに礼法をこの時間に叩き込まれている。それはもう微に渡り細に教え込まれた。と言うか気付いたらダンスまで踊れるようになっていた。花言葉や誕生石の由来なども一通り知ってしまった。どこで役に立つのかは判らないが。

それが済めば、自由時間。昼寝から起きた幼年組が大変暴れるので一番体力の余っている私が引率役になることが多い。

ちよつと庭から出れば山に囲まれているので、子供達を連れて遊びなどに連れていったりもしている。

これも最初は危ながられたのだが、何度かボランティアで引率についてきてくれた獵師さんの証言で今は割と自由にやらせてもらっている。

なんだかんだであの地球で暮らしていた三ヶ月の間にちよつと野生児として目覚めてしまっていたのかもしれない。

夕食も当番制だが、朝とは違う人が作る。例えば今日はデュネットだ。私より一応5歳上と言うことになっている16歳と言うことだが、実のところその年齢よりマイナス3歳は若く見える。ちんまい系の黒髪少女だった。無造作にお下げを二つ作って前に垂らしたり後ろに垂らしたりしている。いつもぼーっとしているが、料理は普通に出来るので先程自由時間で採ってきたキノコを渡しておく。じーっと三十秒ほどキノコを眺めていただろうか、口を開く。

「ティーノは」

「ん？」

「甘いのと辛いのが、いい？」

「……甘いで」

こくんと頷くと、オリーブオイルできのこを炒め始める。

ただ、台所にはシチューのルウが最初から置かれていたのだけど、辛いのもって言ったかどうかものになっていたのだろうか？

喚く好奇心を抑えつつ、キッチンを後にした。

しばらく経ち、出てきた夕食はうん。普通のキノコと鳥肉のシチューである。

それにピクルスやマカロニサラダなどの付け合わせが置かれ、オリーブで再度焼きを入れたパンを並べる。

いつもの合図の後食べ始める。うん、美味しい。

ただ、気になってしょうがない。

「ねえ、デュネット」

「……？」

「シチュー作る時に辛いのもって言ったらかんた？」

「多分」

「多分……？」

「ゆごすにきになるよろこびをもたらすものが」

よく判らないがネタとしても危険な気がしたのでデュネットの口を塞がせてもらった。

夕食後はトランプなどで楽しんだり、本を読んだり、先生は編み物などをしたりしている。

まったりした趣味の時間と言っていいだろう。

私はというと、自分の部屋で教本片手に魔法の練習中だったりする。

そう、何と私にもリンカーコアが確認されていたのだ。

肉体的にもまだ成長しきっていないし、これから変動することはありそうではあるが。

今のところ計測された魔力値は武装局員の平均値の上の方らしい。アリアさんに言わせると、十分魔法使えるし、あまり縛りもない程度のほどよい素質、だとか。

あまり褒められている気もしなかったのだが、グレアムの爺様はリーゼ姉妹も含めたその馬鹿戦力のおかげで里帰りも気軽にいのだとか。そういうのを聞くとほどよい素質という評価も素直に受け入れられそうだ。

ともあれ、私が真っ先に覚えたかった魔法とは、以前リーゼ姉妹の使っていた認識障害である。

何でも幻術魔法とかいうあまり人気のない渋い魔法だそうだが、私のようにどうしても目立つ翼が背中に生えてたりするとその有用性は死活問題にもなってくるというものだ。

確かに本局で検査してる間は出しっぱなしでも問題にならなかったものの、ミッドにきてみればさすがに私みたいなのは居ないのでまた翼を隠すことになってしまっていた。一度開放的に過ごすことを覚えれば中々以前の窮屈さに慣れないのは人の業というものか。そしてとうとう覚えることができたのが半年前。

魔法を習い初めて、真っ先に認識障害を覚えようとして一月。

うん、アリアさんにも同情的な目で見られたり、何度か諦めそうになった。

認識障害はそう難しい魔法でないはずなのに覚えられずに三月。

うん、アリアさんも呆れ顔で、幻術に才能がないのは判ったのだから別の方向で考えてはどうかと言われた。ぐうの音もでなかった。もはや誰もが諦め顔な認識障害の魔法を覚えようとして半年。

やっと発動した。感動だった。これで翼を出したまま生活できる

と喜んだ。あまりの嬉しさにリーゼ姉妹にとっておきの鴨肉のジャーキーを送っておいた。

調子にのって魔法書に乗っていたオプティックハイドという魔法も習得してみようと思い、またもや努力の日々を始める。

これは要するに魔力を使った光学迷彩だ。SF小説ではおなじみでもある。

認識障害は魔力感知が出来る人や勘の鋭い人には効かないらしいので、光学迷彩と組み合わせれば完全に見た目は誤魔化せる。

なんだか全力で後ろ向きな気もするが、それだけ不便さを感じてきたということなのだろう。

しかし、その魔法の習得もこう、巧くコツが掴めないというか、魔力がするつと抜けてどこかに行ってしまうかのような感覚があつて上手くいかない。

と言つても何とか気合いで習得したが、それも半年かけて。

うん。才能ないと言われたけど何とかなるものだった。

酷く時間をかけて覚えたせいか、アレンジの仕方も手に取るように判るし、今では走りながらオプティックハイドで翼だけ隠すなんて真似もお手の物になっている。

一年かけて覚えた魔法は二つだけとか、知られた時にはラフィにすら笑われてしまった。

そんな一年余の生活は充実していたが生憎、調べたいものに関しては充実しているとは言い難かった。

私と同じような姿の有翼種が住んでいる世界、第130管理外世界の事である。

何しろ情報そのものが少ない。辺境すぎる故か。

それこそグレアムの爺様に「まさか、一つの世界に關しての情報があれだけとは、正直思わなかったよ……」とため息を吐かせてしまった程だった。

初めて会った時に見せて貰った情報と旅行者に渡すパンフレット

よりも酷い内容しか管理局のデータには収まっていなかったのだ。

無限書庫にでも行けば、見つかるかも知れないとは言われたものの、本局に居た時に聞いた話によると、凄まじい集積状態で未整理のデータの吐き貯めだとか。

気の長さにはそれなりに自信があるものの、さすがにちよつと腰が引けてしまうのだ。

結局決めたのは、管理局員になることだった。

結局、次元漂流者の保護プログラムの下でだと、第130管理外世界は言うに及ばず、地球にも行くことが出来なかったりする。管理外世界への渡航そのものが認められていないのだ。当然と言えば当然なのかもしれないが。客は客なりにじつとしていてくれと言うことなのだろう。

ならば客でなくなればいいというのが私の結論だった。

幸い地元というにはちよつと離れているものの、東部第3区画にネルソフ魔法学校というところがある。

速成と自由が売りの学校で、飛び級し放題の何とも緩い学校である。

資金に関しては、魔力量に応じての奨学金制度が有り、まあ、計算したところ平の武装局員で一年、技術職で二年もやれば返済できそうな感じではあった。

編入する際には年齢に応じて初等科4年という扱いになるものの、もう子供扱いも慣れたものなので問題ない。

「うっし」

頬を叩き気合いを入れ直す。

取り寄せたパンフレットを見れば次の募集まであと5ヶ月だった。

まずは……苦手な理数系からかな……。

本当に、本当に気合いと努力が必要そうだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7834x/>

---

道行き見えないトリッパー

2011年11月4日07時11分発行